

SNS 空間における日本のジェンダー秩序についての言説分析

目次

序章	2
第1章 メディア研究におけるジェンダーに関する議論.....	5
1.1 マスメディアとジェンダー.....	5
1.2 1990年代からの変遷.....	6
1.3 言説分析について.....	8
第2章 調査概要.....	9
2.1 使用するデータおよび選定理由.....	9
2.2 「わきまえない女」に関する事件概要.....	11
第3章 ツイッター上における「わきまえない女」言説.....	12
3.1 ツイッター上における「わきまえない女」に関わる言説の分析.....	12
3.1.1 女性と女性の対立を表す言説.....	13
3.1.2 女性と男性の対立を表す言説.....	16
3.1.3 フェミニズムに関わる言説.....	20
3.1.4 言葉の意味を説明する言説.....	22
3.1.5 自己アピールに関わる言説.....	26
3.2 小括.....	31
第4章 新聞記事における「わきまえない女」言説.....	32
4.1 新聞記事における「わきまえない女」に関わる言説の分析.....	32
4.1.1 「わきまえない女」の物語を描く言説.....	33
4.1.2 SNSに関わる言説.....	36
4.1.3 「森喜朗事件」の説明および分析に関する言説.....	39
4.2 小括.....	46
第5章 「わきまえない女」言説に内包されたジェンダー秩序.....	46
5.1 「家父長制」と「女性の社会進出」.....	46
5.2 日本における「わきまえる」の背景.....	47
5.3 SNSの社会的機能と「フィルターバブル」.....	48
終章	51
参考文献.....	52

序章

2000年代以降、SNS (Social Networking Service)が急速に普及するようになり、人と人とがつながる可能性は一気に広がり、時間や場所を問わないオンラインの交流が盛んに行われている。SNS とは「サイト内での友人・知人関係の構築（ネットワーキング）を目的に、プロフィールや友人リストなどを登録・公開するコミュニティサイト」であり、すなわち社会的ネットワークをインターネット上で構築するサービスである（濱野2008）。

総務省の平成29年度版情報通信白書（2017）によると、日本における代表的な SNS として、LINE、Facebook、ツイッター等の6つサービスがあげられる。いずれかを利用している割合は、2012年の41.4%から2016年の71.2%にまで上昇し、スマートフォンの普及と合わせて SNS の利用が社会に定着してきたことがうかがわれる。現代社会に生きる人々にとって、SNS はもはや不可欠なものとなっている。

SNS の特性として、使用者は受信のみならず発信できる点があげられる。SNS が普及した初期は、限られた大手マスメディアや有名人が多く行っていた情報発信が、現代に近づくにつれて、一般の個人にも可能となった。つまり、個々人がインターネットに常時接続されることによって、受信だけでなく、発信することが格段に増えたのである。たとえば、ツイッターで自分の近況をネットの友人に伝えたり、Instagram で自分の写真を投稿したりするなど、インターネット空間には「自分に関する情報」が多く含まれるようになっていく。総務省の平成23年度版情報通信白書（2011）によると、SNS の利用目的の上位3項目は、「自分の興味・関心のある情報を伝えたいから（37.2%）」、「自分の興味・関心のある情報を知りたいから（30.8%）」、「自分の近況を伝えたいから（30.6%）」となっている。このように SNS は、現代社会における若者の「自己表現」のツールとして彼らの生活に浸透しているといえるだろう。

上述のようにコミュニケーションによる「自己表現」が活発になると、同時に、一つの対象に誹謗中傷が殺到するという、いわゆる「ネット炎上」が多発するということがみられるようになった。「ネット炎上」についての確立した定義はないが、「ブログ、ミクシィ (mixi)、ツイッター (ツイッター) などに投稿されたメッセージ内容、ならびに投稿者に対して批判や非難が巻き起こる現象」（平井 2012）や「ウェブ上の特定の対象に対して批判が殺到し、収まりがつかないような状態」（荻上 2007）、「ある人物や企業が発信した内容や行った行為について、ソーシャルメディアに批判的なコメントが殺到する現象」（田中・山口 2016）などの事態を指す。以下、本稿においても「東京五輪組織委員会の森喜朗会長が日本オリンピック委員会の臨時評議員会で「女性がたくさん入っている理事会は時間がかかる」と女性蔑視とも受け取れる発言をしたことを巡り、ネット上では森会長へ厳しい声が相次いだ」という事態を「ネット炎上（または炎上）」ととらえ、検討していく。

図1は2016年以降日本における炎上件数¹の推移を表している。これを見ると、日本では、2016年から炎上件数が増加傾向にあり、特に2011年から急速に炎上件数が増えていることが分かる。

¹ エルテス社のサービス eltes Cloud の炎上事例集から取得した。これは、炎上事例を集めているサービスである。エルテス社の公開データから炎上発生件数データを取得する手法は、田中・山口（2016）でも用いられている。なお、エルテス社への調査によって、eltes Cloud における炎上の定義が、「エルテス社が指定するまとめサイトに掲載され、かつ、ツイッターのリツイートが50回以上されているもの」であることがわかっている。

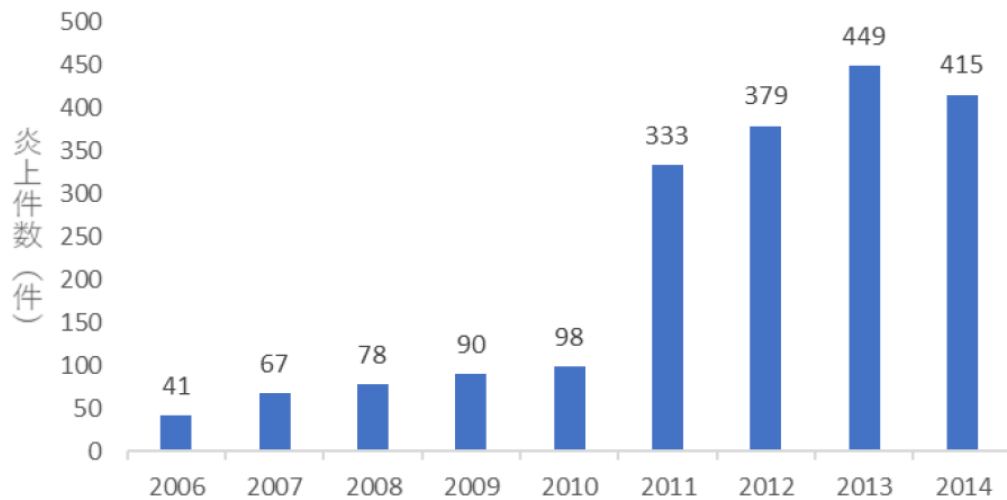


図1 炎上件数推移 (田中・山口, 2016)

このように、近年では、インターネット上で問題表現を批判する「炎上」が多発するようになっているが、それと関連して企業の広告や自治体のPR動画のジェンダー表現についても問題視され、炎上する事例が繰り返されているようになっている(瀬地山, 2020)。例えば、2019年3月のトヨタ自動車株式会社の「炎上」があげられる。ツイッター投稿で「女性ドライバーの皆様へ質問です。やっぱり、クルマの運転って、苦手ですか?」と尋ねたところ、「やっぱりって何?」「苦手選択肢が2つ?バカにしている」などの批判を集めて取り下げたことがある。批判を受けてトヨタ自動車株式会社は、「女性の運転技能が男性より劣るかのような」表現をしたことを謝罪している(治部, 2019)。こうしたジェンダーに関する炎上の背景には、ジェンダーに対する旧来型の固定観念と現代社会に生きる人々が求める「生き方の自由」があると考えられる。三浦(2005)がおこなったインタビュー調査によれば、伝統的な性役割観が変化しつつある現代において、女性の多くは女性性の特性を有している上に不適応的であり、彼女たちは「女性らしさがしばしば自分らしさを否定することを感じている」という。この指摘をふまえるならば、SNSでのジェンダー炎上事件は私たちの日々の生活を規定するジェンダー規範と強固に結びついており、ステレオタイプの「男らしさ・女らしさ」と「自分らしさ」との葛藤を表していると考えられることもできるだろう。

ここで「男らしさ・女らしさ」や「自分らしさ」について簡単に整理しておきたい。これらの概念を理解するためには、ゴフマンのアイデンティティ論と構築主義アプローチが参考になる。まず、ゴフマン(1959)は、エリクソンの「自我アイデンティティ」²と対照をなす「社会的(social)アイデンティティ」と「個人的(personal)アイデンティティ」という概念を提起している。前者は社会的カテゴリーによって性格づけられる個人に対応しており、後者は他の誰とも異なるかけがえのない個人に対応している(ゴフマン, 1959)。この区別に従えば、「男らしさ・女らしさ」は個人に付随する複数の社会的アイデンティティのうちの一つであり、「男」「女」というカテゴリーによって性格づけられ

² エリクソン(1979)は、社会学におけるアイデンティティ概念を青年期以前の諸段階において偶発的に形成されてきたさまざまな自己についてのイメージを一貫したまとまりへと統合していく営みと定義している。すなわち、それは、様々な他者との相互行為を通じて形成された自己イメージを取捨選択し、相互に関連づけながら再配置する過程である。

るアイデンティティであるといえる。

また、多賀（2008）は、社会構築主義の視点を踏まえ、人は女性、男性に生まれるのではなく、社会の中で社会規範としての男らしさ、女らしさを身につけ、演じ、そうして男・女になるという不断の主体的な構築過程にある状況であると論じている。

「ほとんどの人々にとって、「男性」または「女性」であることは、何にもまして個人的経験に関わる事柄である。性役割が「社会化」によって習得される。様々な「社会化エージェント」、特に、家族、学校、仲間集団、マスメディアが成長していく子供たちをコントロールする。数え切れないほどの小さな相互作用を通して、これらのエージェントは、女の子と男の子に、自分の振る舞いについての社会的な「規範」や期待をなんであるかを伝達する」（多賀、2008）

長い歴史を通じて日本に根強く存在する「家父長制」は、戦後の新民法によって廃止されたが、家父長制社会から残った「男らしさ・女らしさ」の固有観念や男性中心的なジェンダー関係が人々の心の中まで強く根付いたといえよう。一般的に、日本社会では、少女は性的魅力がなければならぬと教え込まれ、また少年は、屈強で支配的に見えることの重要性を教えられる（多賀、2008）。このような社会的背景のもとに、SNS 上の数多くのジェンダー炎上問題を考えれば、企業側や自治体側の人々は、SNS を通じてジェンダー化された自己表現を試みながら、模範となる男らしさと女らしさを誇示するのではないか。

他方、従来のジェンダーのとらえ方、すなわち生殖的性差や社会的な性差を一方的に強調するとらえ方を批判する多賀（2008）は、身体と社会構造が相互に影響し合う循環モデルを提唱する。こうした「社会的身体化」の視点を踏まえ、人々は、性役割へと受動的に「社会化」されるのではないと考える。ジェンダーの境界を、あるときは強化し、あるときは横断する。ジェンダー二分法それ自体を利用したり、それに逆らったりしながら、遊ぶことさえもするという。この議論をジェンダー炎上の典型例に置き換えて考えてみると、企業CMの中で描かれたステレオタイプの女性像・男性像が批判を受けることを考えると、ジェンダーの境界を横断することを試みる人や、ジェンダーのヘゲモニックな定義に対して抵抗を示す人はいないわけではない。

本論では、特に現代日本社会におけるジェンダー観が明示されている事件に注目し、日本人の「自分らしさ」と社会が与えるジェンダー規範がいかに表象されているのかを分析し、SNS に生じる「ジェンダー炎上」現象が表している現実社会での反応や評判からSNS 空間における日本のジェンダー秩序を考察したい。

本論は、全 6 章で構成されている。序章には、問題の提起とテーマの設定をもとに、研究目的を提示した。

次に、これまでのメディアとジェンダーに関する研究と言説分析の理論を整理し、研究の妥当性を検討する（第 1 章）。第 2 章では、調査の概要と言説分析において使用するデータを紹介する。第 3 章と第 4 章では、ツイッターと朝日新聞の記事のデータをそれぞれ検討する。この結果を踏まえて、「現代日本人のジェンダー意識」について考察する。

第 5 章では、論文の結論を述べ、最後に今後の課題と展望を提示する。

第1章 メディア研究におけるジェンダーに関する議論

第1章では、これまでの多くの研究の成果を、研究対象及び研究上の歴史の流れに則って、マスメディアとジェンダーに関する研究、1990年代からの（ジェンダーに関する議論の）変遷と言説分析の理論とで整理する。すべての研究と論説を整理することはできないが、そのいくつかの代表的な観点をまとめる。そこで、先行研究の知見を参考に、本研究の理論構築にとって必要な視点を検討する。

1.1 マスメディアとジェンダー

日本において、ジェンダーの観点からマスメディアにのせられた最初の批判としては、1975年に放送されたハウス食品のインスタント・ラーメンのテレビCM―「私作る人、僕食べる人」があげられる。このCMは、婦人団体からの抗議を受け、短時間で放送が中止された（市川，2018）。CMの中には、女性が食事を作り、男性は食べるだけという固定的な性別役割分担を端的に表しており、「男は仕事、女は家庭」「男が主、女は従」といった表現があふれていた当時の日本社会に、問題視された最初の事例である（国広，2012）。

ジェンダー表現が差別にあたるという認識が社会に広がることに伴い、1975年に「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす会」が発足した。この運動体は、議員、研究者、評論家、ジャーナリスト、主婦、学生など幅広い構成員があり、マスメディアの在り方を批判し、NHKや民放各局に性差別に関する抗議行動を積極的に展開し、「女性アナウンサーがいつも脇役である」「番組やコマーシャルに性差別的内容が多い」など具体的に指摘し、性差別の状況の改善を求めたのである（行動する女たちの会，1999）。

歴史的にみると、ジェンダーに関して、日本マスメディアの批判は、主に女性というカテゴリーがどのように表現されてきたかということやマスメディアが描く女性像などを考察することを通じて、日本社会での「女性であること」が、「男性であること」とどう異なり、どんな意味を持つかを明らかにしたのである。

例えば、小玉（1991）は、日本のニュース番組について調査をし、1978年末に放送されたニュース番組の登場人物は、およそ五対一（NHK「ニュース7」）から九対一（TBS「ニュースコープ」）の割合で男性の方が圧倒的に多いことが示されており、日本のニュース番組は、男性の視点から作られているといっても良いということを指摘している。

また、テレビ広告におけるジェンダー表現について、鈴木（1992）は、テレビ広告を対象として分析し、広告モデルに見られる大きな特徴として「若さ志向」と「かわいさ志向」について指摘した。すなわち、広告モデルとして、若い世代のモデルが起用されることが多く、人物の「若さ」が女性の「性」の商品化につながっており、女性が性的対象として描かれている場合が多いことを示している。

同じくテレビ広告を対象とした延島（1998）は、広告の登場場面について、男性は職場で登場することが多いのに対し、女性は家庭で登場することが多かったという。広告での役割において、女性は家庭内、男性は家庭外の役割に従事することが多いことが見られるのである。これらの先行研究には、当時日本のマスメディアの中にステレオタイプなジェンダー秩序がうかがえ、日本のマスメディアにおけるステレオタイプの描写がよく行われていることを明らかにしてきたようである。そして、ジェンダー秩序が一方的にマスメディアに影響するのではなく、マスメディアもジェンダー秩序を維持・強

化する力を持っている。

マスメディアがジェンダー観に対する影響について、まず、田中（1984）は、マスメディアを社会の文化や価値観を映し出す鏡のような存在と捉え、新聞の紙面づくりの底に潜むのは「性の二重基準」、いわゆる女性に対する評価の尺度と男性に対する評価の尺度が、別立になっているというものである。「男らしさ」「女らしさ」の規範は、新聞の紙面にも貫徹しており、男性と女性に関する文化的ステレオタイプを紙面に繰り返し表現することで、性別蔑視のものの見方・考え方・感じ方を再強化する役割を果たしているという。

また、村松（1997）は、広告におけるジェンダーの描写の影響とその重要性を提示している。男女の役割について、非典型的な内容を描いたテレビ広告を視聴した女子学生が、典型的な内容のテレビ広告を視聴した女子学生より、独立的な判断や自信を示す傾向があった調査結果を踏まえ、村松（1997）は、広告を通じて偏った女性観が受け手に繰り返し提示されることで、男女に関する価値観が強化され、受け手の意識と行動に影響する可能性があるとして指摘している。

さらに、国広（2012）は、ジェンダーの視点で日本の娯楽番組を考察し、マスメディアは、人々が抱いている性別に関する常識を増幅する文化装置の一つと捉える。国広（2012）によれば、私たちがある行為を選択したり、しなかったりする際に見えない基準があり、それは「常識」と呼ぶ。これらの「常識」は、その人の立場や経験によって変化するものである。日本社会のジェンダー秩序は、まさにこのような「常識」によって維持され、再生産される相互関係にあると述べている。性別に関する「常識」が、新聞・雑誌・テレビなど従来のメディアの中だけに浸透するのではなく、科学技術の発展に伴い、情報化社会を支える新たな情報伝達媒体というニューメディアの中にもあることは予想に難くない。そこで以下では、1990年代からの「メディアとジェンダー」を扱った先行研究をまとめる。

1.2 1990年代からの変遷

「男は仕事、女は家庭」という固定化された考え方が、新聞やテレビなどの中にあふれていたことを踏まえ、村松（1990）は、パソコンなどのニューメディアの出現が固定化された性役割分業を部分的に解消できると述べている。情報が国際化することにより、新たな性役割モデル・男女観が流入しやすくなり、女性の側にも男性の側にも女性の各分野の可能性が伝わる一方、パソコン通信は時間・場所の制約のないコミュニケーション・システムとして、男性も女性も相互に相手の関心分野に参入することが可能であるからという。

また、村松（1997）は、ニューメディアにおける女性の役割表現は、「家庭主婦」に限定されたものから、働く女性として描かれた場合も増えてきており、女性の身体表現についても、男性視聴者が「眺める対象として」の「女性の身体モノ化」から「女性の身体美」をアピールする場合が増えてきている。これらの変化は、ニューメディアの普及につながるという。

さらに、加藤（2011）は、ニューメディアにおけるジェンダー表現について分析し、村松と似た論点を提示した。加藤（2011）は、携帯電話のメールのコミュニケーションの感情的な側面について、ある感情（悲しみ、喜び）を生起させる状況を設定し、91人の日本人の大学生を対象として調査した。その結果、女性の携帯メールによるメッセージには男性に比べてより感情的な表現が含まれていたことが示された。ニューメディア

の登場、また女性がそれを積極的に利用することにより、女性のコミュニケーションの活性化が推進したという。

そして、同じくニューメディアにおけるジェンダー表現の研究として、田中、高橋（2021）は、男性よりも女性の方が SNS で知らない人とやりとりし、実際にその人と会う傾向があることを指摘した。また、近年では、従来泣き寝入りを強いられてきた女性被害者が SNS を通じて、性的被害を訴え、加害者が社会的制裁を受けるというジェンダーに関する記事が増え、これらの記事は知らず知らずのうちに、多くの女性のジェンダー意識を高め、SNS が社会変革のための重要なツールになっているという。つまり、女性がニューメディアに活発に発信することは、ステレオタイプなジェンダー秩序に対抗する一つの手段と言える。

上記の研究と少し異なるスタンスで行われた研究もある。それは、SNS 上のテキストを分析することにより、ジェンダーのステレオタイプを明らかにするという研究である。瀬地山（2020）は、広告がジェンダー炎上になった理由を明らかにするため、ここ数年の間に、ジェンダーに関する SNS 上の批判的になった CM や PR 動画のパターンを分類し、大きく 4 象限の図式を作った（図 2）。まず、縦軸に「商品や描写内容の訴求対象」をとり、「女性」をターゲットに、応援あるいは共感を狙ったものに対し、その反対側は、「男性」向けの、「男性」の視線に沿ったものである。一方、横軸にその CM のメッセージ、すなわち「炎上ポイント」の「性役割」、「容姿・性的メッセージ」をとる。すると、SNS 上における問題となる CM のほとんどが、ステレオタイプなジェンダー秩序の固定や強化につながり、この 4 つのいずれかに当てはまると述べている。

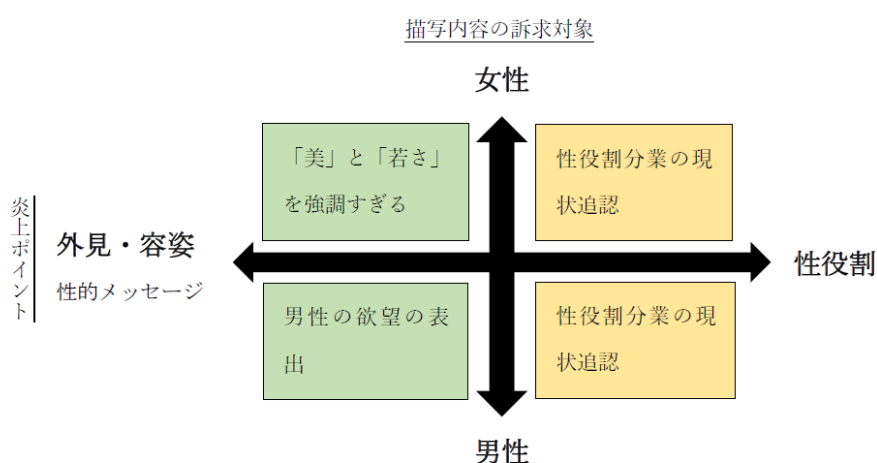


図2 「炎上」した広告の4象限（瀬地山，2020）

以上の議論をまとめるならば、日本のマスメディアにおけるジェンダー表現に対し、おもに、固定的な性役割（「男らしさ」や「女らしさ」）、固定的な性別役割分担（「男は仕事、女は家事」）、性的な対象としての女性描写という三つの観点から批判されてきたといえよう。1970年代以来、マスメディアに登場した女性の割合は男性よりはるかに小さく、しかも男性の補助役として位置付けられることが多い。現在の日本社会においても、決定権、命令権を持つ職業には男性が多く、それを補佐するものと位置づけられがちな職業、あるいは小学校、幼稚園の教員など母親役割の延長線上にある女性向きとされる職業には女性が多いという傾向がある。このように考えるならば、女性が SNS など

のメディアを通して積極的に発信することによって、ジェンダー配置に偏りがある現状の改善や、家父長制的なジェンダー配置に対抗する手段となるという見方もできよう。

しかしながら、これまでのメディア研究では、このような伝統的なジェンダー秩序の強化や、拡大などについて関心を向けられることは多かったが、メディアを利用する男性や女性自身の意識、彼らの性差別などのジェンダー問題に対する読み方などに注目する研究は多くない。現代若者のジェンダー意識に関しては、個人の意思の背後にある社会環境や社会規範など多くのものに影響されている。また、日本のジェンダー秩序そのものが時代の変化や技術の発展により、変容することであり、個々人のジェンダー意識を要素として織り込んでいる現代社会の在り方も変化していくととらえるのが自然であろう。したがって、日本のジェンダー秩序を把握するには、社会構造を明らかにすることが必要である。その社会構造を把握する有効な手段の一つとして、SNS 空間に残された言説によってアプローチすることがあげられる。分析をおこなう前に、本稿において社会構造を把握する手段の一つとして取り上げる、言説分析について述べておきたい。

1.3 言説分析について

そもそも性差別などの社会問題は誰が、どのようにして判定したのか。これは客観的事実というより、人々がそれを事実として主張し、認定する過程で構築されたのだろうか。このような発想に基づきながら、ヴィヴィアン・バー（1997）は、構築主義を「社会や人間の思考と行動などの「表面の」現象を生み出すと考えられる説明的構造への信念と探求」と解釈した。また、社会問題の構築について、イバラとキツセ（1993）は、「状態のカテゴリー」とその用いられ方を研究対象とする立場を提示した。彼らによれば、「状態のカテゴリーとは社会的に規定された活動や過程の類型」であり、「それは実践のコンテクストのなかで使われ、社会的現実についての意味をなす記述や価値を生み出す」「分類の体系の一部」である（イバラ・キツセ，1993）。このように、社会問題の構築主義の主要な観察と分析の対象はクレイム申し立て活動であり、そのクレイム申し立て活動の「対象」それ自体が実践のコンテクストの中で用いられる「状態のカテゴリー」であり、活動と活動の対象は相互に支え合う関係にあるわけであるという。

さらに、ベスト（2016）は、「状態」に着目し、「社会問題は人々の主観的な考えや言説とは独立に客観的に実在しない」という社会問題の構築主義を提示しており、ある「状態」が社会問題になるかどうかは、客観的な基準というより、複数の異なる人々の視点、すなわち主観的な基準によると考える。つまり、性差別などの社会問題は、ある客観的な「状態」ではなく、人々がそれについて自らの思考と苦情を述べ、クレイム申し立てという言語活動を通じることで、それをある「社会問題」と認識するのであろう。

性差別などの社会問題が人々の認識によって構築されるという構築主義の考え方に従えば、ジェンダーそのものも社会的に構築されたものだといえる。ジェンダーの社会的構築について、江原（2001）によれば、ジェンダーが特定の形で「社会的に構築」されているため、男女は異なる権力と義務を課され、異なる言説とふるまいを生み出しつづける一方、その異なる言説とふるまいがジェンダー・イメージを強化するような言説を再び生み出す。このような循環の中で、「女」と「男」は実体化されるのである。また、江原（2001）は、「女」と「男」という「ジェンダー化」が構築されると同時に、「性支配」も構築されるとも指摘している。すなわち、「ジェンダー化」された社会的世界においては、男女は同じ物理的空間を共有しながら、社会が男女に全く異なる社会的世界を割り当てることによって、全く別の世界に住まうということが生じるのである。そして、

男女は、それぞれ割り当てられた全く異なる社会的世界に対処するために、異なる社会的実践を操り広げる。「女らしさ」「男らしさ」などのジェンダー知は、この男女で異なる社会的実践を、また、男女の「性差」に還元してしまうという。

こうした社会の実践にアクセスするためのツールの一つとして、言説がある。バー（1997）は、言説を「何らかの仕方でまとまって、出来事の特定のヴァージョンを生み出す一群の意味、メタファー、表象、イメージ、ストーリー、陳述、等々」を意味づけるものだとしている。その言説をデータとして用いる研究手法である言説分析をおこなうことについて上野（2001）は、「社会学で構築主義を採用する場合、アクセスできる研究資源は、通常、言説だけなのだから、言説の内側をより精査に分析すればよいという一種の割り切りがある」と述べる。

SNS の普及により、「ジェンダー秩序」がメディアの世界にも覆いつくしている現在において、ネット上のクレーム申し立ての言語活動は従来よりも可視化された状態にあるといえよう。後述するようにジェンダーに関するステレオタイプな発言をめぐり、対立し合う陣営双方の論争は現実生活のみならず、ネット上でも頻繁に起こるようになっていく。本研究では、クレーム申し立て活動の痕跡として残った SNS 空間の「言説」を分析することによって、日本のジェンダー秩序についての検討を試みる。

第2章 調査概要

本研究では、SNS 上の言説としてツイッターの言説（第3章）、そして比較対象として新聞記事の言説（第4章）の分析をおこなう。そのため本章では、分析に使用するデータについて述べておきたい。

2.1 使用するデータおよび選定理由

現在、世界で最もよく使われている SNS は、LINE、Facebook、ツイッターと Instagram などであろう。多くの人が SNS を利用しており、特に、Facebook、ツイッターと Instagram の活動データがログとして記録されていることが多い。そのため、これらの SNS は一般の人々の動向を捉える対象としては優れており、いわゆるデータ分析の対象としては有用だと考えられる。

「ツイッターユーザーによる企業公式アカウント利用実態調査」（2020）によると、日本におけるツイッターの月間アクティブユーザー数は 4500 万人であり（2017 年 10 月時点）、各種 SNS の中で、LINE に次ぐ国内第 2 位のユーザー規模を誇る。また、Facebook や Instagram と比べ、ツイッターの利用率では、いずれの年齢層においても高く、大きな男女差も見られなかったため、本研究では、ツイッターを対象として取り上げる。

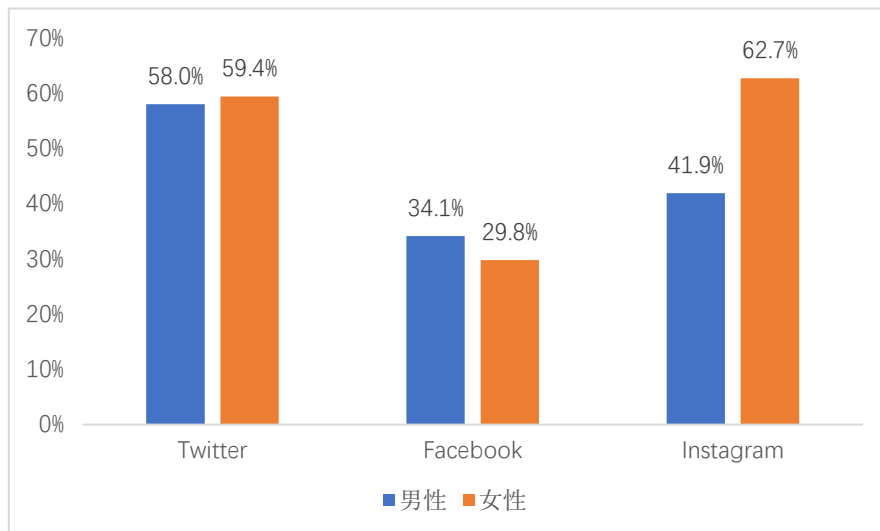


図3 性別とSNS利用率（「ツイッターユーザーによる企業公式アカウント利用実態調査」，2020）

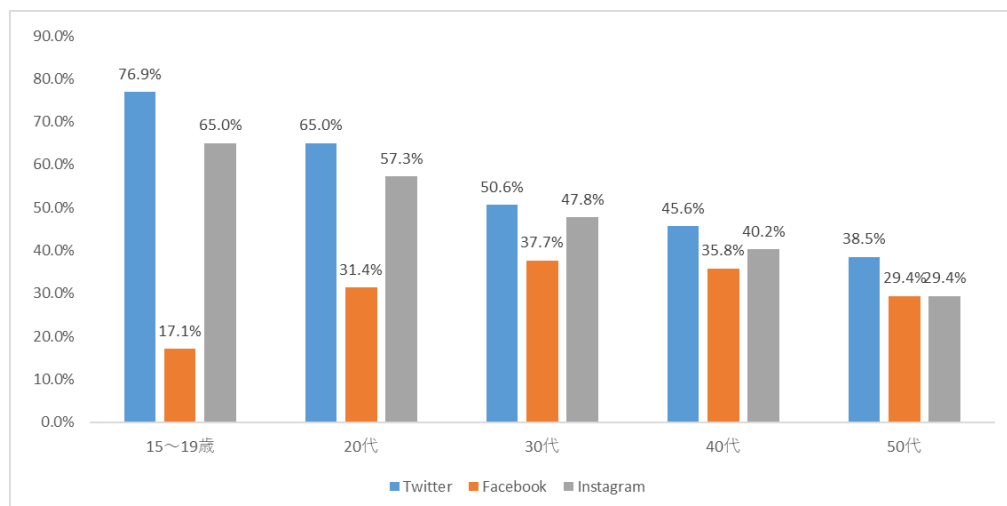


図4 年齢別SNS利用率（「ツイッターユーザーによる企業公式アカウント利用実態調査」，2020）

ツイッターのデータを集めるために、東京大学の鳥海が開発した Web Tweet Crawler(<http://torix.sakura.ne.jp/ツイッター/>)という WEB アプリケーションを利用した。このアプリケーションの内部では、ツイッターAPI を利用するため、ツイートやタイムラインの取得、「リツイート」や「いいね」といったツイッターのサービスを、公式のウェブサイトを経由せずに直接利用できる一方、API の制限は同様に受けることになる（表1）。

表 1 WTC によって得られるデータ (出典: Web Tweet Crawler <http://torix.sakura.ne.jp/ツイッター/>)

列名	説明
id	Tweet ID
screen_name	ツイートユーザのScreenName
name	ツイートユーザの名前
created_at	ツイート作成日.
text	ツイート本文
retweeted_id	リツイート元のID
retweeted_user	リツイート元のScreenName
retweeted_create_at	リツイート元の投稿日
in_reply_to_screen_name	リプライ先のScreenName
in_reply_to_status_id	リプライ先のTweetID
in_reply_to_user_id	リプライ先のUserID
source	ツイートを投稿したアプリ
retweet_cnt	リツイート元のツイートのRT数
favourite_count	Like数
user_id	ツイートユーザのユーザID
statuses_count	ツイートユーザの総ツイート数
followers_count	ツイートしたユーザのフォロワー数
friends_count	ツイートしたユーザがフォローしている数
favourites_count	ツイートしたユーザの総ふぁぼり数
keyword	検索に使ったワード

日本人のジェンダー意識を明らかにするため、本研究では、ツイッターAPI を使い、その時効性を考えた上に、ネット炎上の一例として、2月4日のツイッターではトレンド1位になる「わきまえない女」というキーワードを取り上げる。そのため、まずは「わきまえない女」に関する出来事の概要を述べておきたい。

2.2 「わきまえない女」に関する事件概要

2020年2月3日、東京五輪・オリンピック大会組織委員会の森喜朗会長による「女性の多い会議は時間がかかる」などの発言に対し、ツイッターなどのSNSで「女性蔑視」との批判が巻き起こった。

森喜朗会長の女性理事に関する主な発言は次の通りである。

「(前略) これはテレビがあるからやりにくいんだが。女性理事を選ぶっていうのは、4割、これは文科省がうるさくいうんですね。

だけど、女性がたくさん入っている理事会は、理事会の会議は時間がかかります。これは、

ラグビー協会、今までの倍時間がかかる。女性がなんと 10 人くらいいるのか？5 人いるのか？女性っていうのは競争意識が強い。誰か 1 人が手をあげて言われると、自分も言わなきゃいけないと思うんでしょうね。それでみんな発言されるんです。(中略) 女性を必ずしも数を増やしていく場合は、発言の時間のある程度、規制を促していかないとなかなか終わらないで困ると言っておられた。誰が言ったとは言いませんけど。

私どもの組織委員会にも女性は何人いました？7 人くらいかな。みんなわきまえておられて。みんな競技団体からのご出身であり、国際的に大きな場所を踏んでおられる方々ばかりです。ですから、お話もシュツとした、的を射た、そういう我々は非常に役立っておりますが。欠員があるとすぐ女性を選ぼうということにしているわけであります。」(朝日新聞 2021 年 2 月 9 日 「森会長、撤回で終わり？いらだち隠せず、強まる逆風 女性蔑視発言」)

このように、森会長が、発言の短い組織委員会の女性理事らを「わきまえておられる」と称えたことを受けたもので、ハッシュタグ(投稿用のキーワード)が作られると SNS 上で一気に共感が広がった。ツイッターでは 4 日午前、「#わきまえない女」という言葉がトレンド 1 位になった。

批判の高まりを受け、森会長は 4 日の会見で「女性を蔑視する意図はまったくない」と弁明し、そして謝罪したが、その際の対応も「反省していない」などと批判され、ツイッターでは、「明らかな女性蔑視」「時代錯誤な差別意識」といった書き込みが相次いだ。

ツイッターには、「わたし達の今の生活は過去のわきまえない女達のおかげで成り立っている」との感謝の声や、「今を生きる私たちが継いで声を上げなきゃいけない。黙らない。わきまえない」「わきまえない女でありたい」といった投稿もあった。

森氏の発言への批判だけでなく、それを許容するいまの日本社会への問題提起もあった。「森さんが退任すればいいって話じゃなく、問題はこんな発言をするような感覚の 80 代の元首相が大会組織委員会の会長になるような社会なのかということ。」という書き込みには 1 万を超す「いいね」が寄せられ、「おっしゃる通り」「ほんとコレ」「時代が昭和のまま」などと共感がみられた。

第 3 章 ツイッター上における「わきまえない女」言説

本章では、上記の森喜朗氏の発言に端を発した「わきまえない女」に関するツイッター上の言説の分析をおこなう。ツイッター上の言説を 5 つに大別したうえで、それぞれに分類された具体的なツイートをあげてその内容の説明や解釈をする。

3.1 ツイッター上における「わきまえない女」に関わる言説の分析

本研究では、ツイッター上の 2021 年 2 月 26 日から 3 月 28 日までのユーザーの発言のうち、「わきまえない女」というキーワードを含む投稿を分析対象とした。リツイートや、分析できない新聞記事のコピーや、意味不明な投稿などを除外し、この期間で該当したツイート数は 314 件であった。全部のツイートを一読し、「わきまえない女」の扱い方による分類を行った。

まず、「わきまえない女」に関する記事は大別すると 5 つの言説で形成されていた。具体的には、下次のとおりである。

- ① 女性と女性の対立を表す言説（95 件）
- ② 女性と男性の対立を表す言説（67 件）
- ③ フェミニズムに関わる言説（23 件）
- ④ 言葉の意味を説明する言説（70 件）：「わきまえる女」や「わきまえない女」に対する定義をつける言説である。
- ⑤ 自己アピールに関わる言説（84 件）：ある人は「わきまえる女」あるいは「わきまえない女」を名乗ることに関わる言説である。

次に、論調で投稿进行分类した。ここでいう論調とは、当該投稿が「わきまえない女」に対し、プラスのイメージを持つか、マイナスのイメージを持つか、あるいはそれを肯定しているか否定しているかを判断するものである。プラスのイメージあるいは賛成であれば「肯定」、マイナスのイメージを持つあるいは反対であれば「否定」、中立的意見あるいは、いずれも言及していなければ「中立」というコードが付与される。

以上の投稿分類を集計した結果は表 2 のようにまとめられる。なお、投稿の分類が重複すると判断した場合は、それぞれの各分類項目に加えている。以下、概要を示し、その上で詳細を考察する。

表 2 ツイッターにおける「わきまえない女」に関わる言説の分類

	「わきまえない女」に対するイメージ			
わきまえない女に関する言説	中立	否定	肯定	合計
①女性と女性の対立を表す言説	34 (34.36%)	55 (55.58%)	6 (6.6%)	95 (100%)
②女性と男性の対立を表す言説	37 (55.22%)	18 (26.87%)	12 (17.91%)	67 (100%)
③フェミニズムに関わる言説	5 (21.74%)	18 (78.26%)	0 (0%)	23 (100%)
④言葉の意味を説明する言説	17 (24.29%)	48 (68.57%)	5 (7.14%)	70 (100%)
⑤自己アピールに関わる言説	20 (23.81%)	41 (48.81%)	23 (27.38%)	84 (100%)
合計	113 (33.33%)	180 (53.10%)	46 (13.57%)	339 (100%)

出典：ツイッターデータ分類による筆者作成

3.1.1 女性と女性の対立を表す言説

今日、ネット上の掲示板やコメント欄でのトラブルあるいは炎上は、日常茶飯事である。今回の調査で取り上げた「わきまえない女」に関する投稿でも、各立場に立つ人々の激しい論争が見られ、特に女性同士の論争と男女間の論争が目立った。そのため、今回の分析は、女性と各社会集団との論争に関わる言説をいくつかのパターンに分け、その中に典型的な言説を抽出し、それぞれ分析していく。まずは、女性同士の対立を表す言説から見てみよう。なお、以下では抽出・引用したツイート内容のツイート日とツイートユーザ名を【2021. 3. 2：竹下郁子】のように表記する。

投稿 1 【2021. 3. 2 : 竹下郁子】

「わきまえた女」には大きく 2 タイプいると思う。1 つ目のタイプは、自分も「男化」することで既存システムに適応し、男性の感覚を取り込む女性。もう一つは「私は男性のサポート役でいい。別に差別されているとは思わない」と、現在の構造に疑問を持たない女性だ。「タイプは違うが、両者の共通点は「(男から見て) 余計なことを言わない」こと。いずれも、男性中心社会にとって「都合のいい女」、もっと言えば「女の足を引っ張る女」になっていると思う。こういう女性が多いと、起こるべき変化が遅れ、後に続く世代にとってマイナスだ。

この投稿者は、「わきまえた女」を「男性中心の家父長制的な旧社会に適応する女」として捉える。男女平等の社会にとって、「わきまえた女」より「わきまえない女」の方が必要であり、「わきまえた女」は「女の足を引っ張る女」になることを指摘している。

続いて、「わきまえない女」について、投稿 2 にも似たような論点が見られる。

投稿 2 【2021. 3. 27 : わきまえないライジ】

「わきまえた女」として女を言い訳に色んなものを諦めたり逃げたりして生きていくと、「わきまえない女」、諦めないで戦ったり色んなものを実現してきた女に出会った時に嫉妬心や羨望が揺らぐ。

そこで気づけばいいんですが、気づくこともなく、男たちと一緒にあって「わきまえない女」の足を陰から引っ張ろうとする「わきまえた女」、結構いますから。そういうミジメな人生は送って欲しくないなあ、と思いますね。

この投稿者は、「わきまえた女」になりたくないことを示している。「わきまえた女」とは、男社会に適応するために、自分が追求するものなどを諦めたり、逃げたりして生きている女性のことを指す。それに対し、「わきまえない女」は男社会に挑戦し、いろんなことを実現できる女性のことであり、「わきまえない女」の足を引っ張ろうとする女性のことを指す。

このような「わきまえない女」を応援・肯定する投稿が見られる一方、中立的な意見を持ち、そして、「わきまえない女」を批判・否定する投稿も多かった（表 2）。まず、中立的な投稿の典型例として、投稿 3 と投稿 4 を見てみよう。

投稿 3 【2021. 3. 2 : 肉子】

わきまえない女と自称してる人は多いけど、わきまえた女と自称してない人をカテゴライズするのはレッテル貼り。 似たような価値観でもそんな分類分けできるほど、個人は単純じゃないよ。生き方や存在って男にも女にも否定されたくないよ。

この投稿者は、わきまえること自体も個人の価値観の一種と捉え、勝手に「わきまえる」、「わきまえない」という言葉を使い、人を分類するのはレッテル貼りであり、人の生き方や価値観を否定してしまうことになることを指摘している

投稿 4【2021. 3. 3：鴨南蛮@香港加油、コロナファイター】

何だ？この決め付けは。私は、専業主婦は望ましい日本の伝統的なあり方だという決め付けにも反対だけどね。一体、どんな女性を目指せばいいのか？お婆さんの私は、今更わきまえない女になりたいとも思わないけど、わきまえてるわけでもないし。こんなに生き方を決められると、息苦しいよ。

投稿 4 も他人にレッテルを貼られたくないことを示している。この投稿者は日本伝統の家父長制的なあり方に反対し、わきまえる女になりたくないが、わきまえない女になることも考えたことはない。今ネット上の「わきまえる女」と「わきまえない女」の論争には、「女性が〇〇をやるべきだ」など女性がしばしばレッテルを貼られ、女性としてこんな自分の生き方を決められるのは感じが悪いと主張している

このように、中立的な意見については、主に女性の価値観の多様性や生き方の自由を強調している。一方、「わきまえない女」を批判する投稿については、主に「わきまえない女は社会に適合しない」ということから論じている。次の 2 つの投稿は「社会適合説」の典型例である。

投稿 5【2021. 3. 2：まっちゅむら】

社会に適合することを止めたのが「わきまえない女」か 要するに社会不適合者ってわけやんw
それなら今後もあいつらの言う事は無視でオーケーだね。

「わきまえた女」は社会に適合した女性 「わきまえない女」は社会に適合できなかった女が自分を正当化したくて名乗ってる別称 要するに社会不適合者が開き直った姿が「わきまえない女」ってことですよな？

投稿 6【2021. 3. 3：n】

男性が多い社会で頑張って結果出している女性を「足を引っ張る女」と揶揄するのが「わきまえない女」なら、私は「わきまえる女」でいたいです。

投稿 5、投稿 6 など「わきまえない女」を批判する投稿は、主に「わきまえない女」を社会不適合者として扱っていることがわかる。今の社会を生きていくには「わきまえる」ことが必要であり、逆に、「わきまえない女」は「わきまえる女」の足を引っ張ると論じている。また、今回の調査では、「社会適合説」を論じる際に、「社会」を「職場」として捉える投稿もいくつかあり、以下の 3 つの投稿を合わせて分析する。

投稿 7【2021. 3. 15：葵】

わきまえない女が会社を潰すこともある。

投稿 8 【2021. 3. 16 : 嶋田 (治療家・癒し研究家)】

わきまえる女は男社会を甘やかし同世代以下に悪影響を与えるという記事が出ていたが、視野が狭すぎていただけない。 わきまえない女が叩かれるのは当然。なぜなら、男女問わずわきまえない人は組織人として最低の存在だからだ。 どうしてもわきまえないなら起業して自分で仕事すればいい。

投稿 9 【2021. 3. 17 : Shuta-H】

「わきまえない女」の記事を書いたわきまえ罪クリエイターのこの人、ジェンダー云々以前に協調性の問題で、こういう人は会社勤めや組織の一員として働くのに向いてないので、自分と気が合う人やわがママを聞いてくれる人相手に仕事した方が本人も周りの人も幸せ。

これらの投稿は、日本の企業や組織で働いている女性を「わきまえる女」と「わきまえない女」という 2 種類で分け、「わきまえない女」は企業などに害をもたらす一方、それに適応する「わきまえる女」は企業の価値を向上させ、また、周りの人との人間関係もうまくいくと考えていることがわかる。

3.1.2 女性と男性の対立を表す言説

ここまで「わきまえない女」という言説において、女性同士の論争と関連させて論じられる言説を分析してきた。次に、「女性と男性の対立」に関わる言説を分析する。

女性と男性の対立を表す言説の論調については、中立的な意見が最も多く、(55.22%)、「わきまえない女」を応援・肯定する投稿やそれを批判・否定する投稿の割合は、それぞれ 26.87%、17.91%であり (表 2)、「わきまえない女」を肯定する言説より、それを否定する言説の割合が圧倒的に多い。

まず、「女性と男性の対立」に関連付けられた「わきまえない女」に関する中立的な論調の投稿を見ていこう。

投稿 10 【2021. 3. 1 : しゅん D】

わきまえない女か男かという対立軸じゃなくて、性差別や性暴力に反対するかどうかだし。トップが女だからって支持しないし。違う、と思ったら何度も声を上げるのが運動だろうと思ってます。森で終わりじゃない。というのが個人の意見です

投稿 10 は、「わきまえない女」の炎上をめぐり、男性集団と女性集団の論争について、どの集団の立場が正しいかについては関係なく、重要なのは性差別と性暴力という行為に反対することだと説明している。

投稿 11【2021.3.16：るが】

「わきまえる女」は森さんの発言と同じくらい女性差別な言葉だと思うけど。だって全く女性の自主性を尊重していないじゃん。“男性的”な意見を言うのはわきまえた女だからって何よ、その人がわきまえない女になったら意見が変わると思っているの？本当は思っていないけど男社会で生き残る為やっていると？

投稿 11 は、女性の自主性を強調している。公の場面では、はっきり意見を言う女性がいる一方、意見を言わない女性もいる。それは女性自身の個性・性格につながり、わきまえるかわきまえないかに関係はない。よって、「わきまえる女」と呼ばれる女性たちが自分の意見を言わない理由は、必ずしも男社会に生き残るためというわけではない。

投稿 12【2021.3.1：空 満 暮】

ああそうだ、それだ。男性が、わきまえて生きているから、わきまえない女を叩くんだ。よく考えたら子供の頃からガキ大将下の集団というヒエラルキー環境で遊ぶ人が多い男性の方が「わきまえさせられる」ことが常なのかもしれない。女性の集団は関係がフラットで話し合いで物事を決める場面が多いかも。

投稿 12 は、男性が「わきまえない女」を叩くことは、日本の男女が成長した環境が異なることにつながると説明している。この投稿者によれば、男の子は、ガキ大将の下の子というヒエラルキーが形成された環境で遊ぶ子が多いため、いわゆる「縦の関係」の中に「わきまえさせられる」ことが常にある。それに対し、女の子の集団は「横の関係」であり、話し合いで物事を決めることが多い。よって、わきまえて生きている男性が「わきまえる」という集団のルールを破る「わきまえない女」を叩く可能性がある指摘した。

このように、「女性と男性の対立」に関連付けられた「わきまえない女」に対する中立的な論調の投稿においては、男女対立や性差別の反対、女性の自主性の尊重、成長環境の重要性がしばしば言及される。次は、「わきまえない女」に関する肯定的な論調の投稿を見てみよう。

投稿 13【2021.3.21：昨晚お会いしましょう】

東京五輪をめぐっておこなわれていた佐々木氏による MIKIKO 氏へのむごい仕打ちはもちろんだが、ようするにこれは森氏や佐々木氏という権力を持った男性による「わきまえない女」排除の問題であり、組織委の体質を象徴する重大事であることは言うまでもないだろう。

投稿 14【2021.3.16：孫崎 享】

「わきまえる女たち」が築き上げた罪の重さ”とあるが、女性の中に「わきまえない女たち」が出ているのがすごい。男たちは「わきまえる男たち」だらけなのだから。特に権力に近ければ近い

投稿 13 と 14 は、男社会の権力関係から論じている。投稿 13 によれば、今回の「わきまえない女」に関する炎上は、要するに森喜朗などの権力を持った男性によるわきまえない女性を排除しようとするものである。そして、投稿 14 は、女性と比べ、男性はほとんどが「わきまえる男」であり、権力に近ければ近いほど、よりわきまえる傾向が見られると説明している。

投稿 15【2021.3.1：わきまえないはじめ】

わきまえない女はわきまえない女だけど、わきまえない男はそれただの男なんでは

投稿 16【2021.3.2：チキささ】

【風を読む】「わきまえた男」になりたい！ 論説委員長・乾正人 <https://t.co/FjpujJj8uj> 本文は読まなくて良いんですけど、差別発言に対して女性たちが産み出した「わきまえない女」という言葉を、うまいこと言った的に男性が使うのなかなかクソ。

今のツイッターでは、「わきまえない女」についてマイナスなイメージをもつ人が少ない。投稿 15 は、「わきまえない女」がしばしば批判されるネット上の現状について、「わきまえない男」が批判されることは多くなく、特に、それに対してマイナスなイメージをもつ人が少ないことにも疑問を持っている。また、投稿 16 も「わきまえない女」は最初、女性差別を批判する際に生み出した言葉であり、男性が「わきまえない女」という言葉を使い、女性を攻撃するのは不満を感じると述べている。

次は、「わきまえない女」に対する否定的な論調の投稿、つまり「わきまえない女」を批判する言説を分析していく。

投稿 17【2021.3.15：ばやし入道】

わきまえる女だとか、わきまえない女だとかアホくさい。男だって出世したかったら上司に媚びるだろ。媚びるって悪い言葉に聞こえるかもしれんが、相手をちゃんと慮って円滑なコミュニケーションを取る事は大事ですよ。

投稿 18 【2021. 3. 15 : 725】

わきまえない男はわきまえた方がいいし、わきまえない女はわきまえた方がいいんじゃないの？
わきまえないよりわきまえた方が仕事できそうやけど？ え？それだけの話じゃないん？ てかいつ
まで言うてんの？笑 #わきまえる女 #わきまえない女

投稿 17 と 18 は、「わきまえる男」の立場から論じている投稿である。「わきまえる」という言葉は「相手を慮って円滑なコミュニケーションをとる」と意味しているため、男女問わず、わきまえる人のほうが効率よく仕事を進められると説明している。

投稿 19 【2021. 3. 5 : ぴか】

女ってさ、偉くなったときの教育されてないでしょ。それが今の日本のわきまえない女とか抜
かしてる権力者の暴走の原因。男は、男の方が女より強いんだから我慢しなさいとか、他人より
偉くなったらどうするとか、教育される人が多いと思うのですが、女は長女でもない限りはその
機会ほとんどなさそう。

投稿 19 によると、わきまえない女の主体は女性権力者であり、男性権力者と比べ、女性権力者は偉くなったときの教育不足が問題視される。男は「偉くなったら我慢しなさい」と教育される人が多いが、女は長女でもない限り、そういう教育を受ける機会はほとんどない。それは、今、炎上になっている「わきまえない女の暴走」の理由かもしれないと説明している。

また、わきまえない女のツイートをより直接的に批判する投稿もあり、次の 3 つの投稿を合わせて分析していく。

投稿 20 【2021. 3. 17 : 闇鍋奉行】

大変ですねw 研鑽すれば、弁える女になれるでしょう。 「私が認められないのは差別のせい、
男社会のせい、おじさんを撲滅せよ！」なんていうわきまえない女なんて、ただ怠惰で傲慢なだけ
です。

投稿 21 【2021. 3. 17 : ごろまき@ゆるキャンパー△】

『これだから女は』と大昔から 言われてる内容は、偏見ではなく やっぱり傾向的事実でした、
と完全証明している方々ですものね

わきまえない女がツイートする度に女性の社会的信用が下がっていく。

男達の場合なら、ここまで大規模な反文化的集団なんて発生しないから

投稿 22【2021. 3. 26：悪の総務省は、技術的助言で最高裁判所を拘束する】

引用ツイートもそうだけど、この程度のツイートで、連れ去り被害者の口を塞げると思われているほど、情弱だし、穏和だと思われてるんだよね。

男性が見習うべきは、わきまえない女たち。

あいつらのわきまえないさが、男尊女卑からの女尊男卑を実現したのは、本当にスゴい。

今のツイッターでは、わきまえない女に対する批判は主に 3 つのパターンに分けられる。一つ目は、わきまえない女の性格や態度を批判する投稿である。このような投稿は、男性や男社会に不満を感じるわきまえない女は傲慢であり、マナーが悪いなどと捉えている（投稿 20）。二つ目は、わきまえない女が女性集団にもたらしている悪影響について批判する投稿である。このようなわきまえない女のツイートは、女性全体のイメージを悪くし、女性の社会的信用を低下させていく（投稿 21）。三つ目は、わきまえない女が男女平等を過度に求める際、「男性差別」になってしまうことを批判する投稿である。今までのわきまえない女の発言から見れば、彼女らは男尊女卑の社会変えようとした結果、男女平等の社会ではなく女尊男卑という不平等な社会を実現してしまった（投稿 22）。

3.1.3 フェミニズムに関わる言説

続いて、今回の調査では、「わきまえない女」について語るとき、フェミニズムに何らかの形で言及する投稿も見られた。フェミニズムに関わる言説の論調については、主に「わきまえない女」を批判・否定する投稿であり、約 8 割を占めている。「わきまえない女」に関する中立的論調の投稿は 5 件しかなく、また「わきまえない女」を応援・肯定する投稿はほとんどなかった（表 2）。「わきまえない女」と「フェミニズム」が同時に言及された場合、「わきまえない女」はネガティブなイメージが多いことが分かる。

まず、フェミニズムに関わる言説の中に「わきまえない女」に関する中立的な論調の典型例として、以下二つの投稿を紹介しよう。

投稿 23【2021. 3. 20：ribrib】

社会学が気に入らないというより、女性で識者で弁が立つとか、フェミニズム自体が大嫌いなんですかね。 わきまえない女は嫌いだ、と。 検索して見るのもメンドーなのではないけども…。

投稿 24【2021. 3. 22：ずいまく】

フェミニストは、「主張する女」「黙らない女」「わきまえない女」が大嫌いですからね。

投稿 23 と 24 は、「わきまえない女」について特に評価しなかったが、「フェミニストはわきまえない女が大嫌い」という「フェミニストとわきまえない女の対立状態」を説

明している。一方、「わきまえない女」を批判する否定的な論調の投稿では、フェミニストをわきまえない女と同じ社会集団と認識する言説は多く見られる。

投稿 25【2021.2.27：それいけ社畜さん】

フェミの方々は「女性」じゃなく「自分の都合の良い生活」を求めているだけです。自分は社会に出てから一度も性別のせいで挫折を感じたことはありません。全ての失敗を性別のせいにし、わきまえない女さんたちのわがママが大きすぎて「女性みんなの意見」のように見えているので、恥ずかしい限りです

投稿 26【2021.3.3：たんたんの物申す格闘技&ゲーム実況】

自分は「わきまえない」けど、自分が気に食わない女は「わきまえ」させる。
フェミのダブスタって超人的だよな。ぶっちゃけ少しは学んだほうがいいと思うわこれ。ダブスタ気にしない人生楽だと思いうw

投稿 27【2021.3.16：透明】

わきまえない女ってより迷惑な女になってんだよなフェミさんはさ……。 わきまえない女なんて別にかっこよくないというか、「私はわきまえない女だ！」なんて言ったらクソキモいんだわ……

投稿 25 によれば、わきまえない女の投稿が SNS 上に拡散されることによって「女性みんなの意見」のように見えているが、実際は少数のフェミニストのわがままな意見である。フェミニストは女性のために、女性より良い生活を求めるということよりも、自分に都合のいい生活だけを求めるわきまえない女である。

また、投稿 26 の投稿者は、フェミニスト自身がわきまえない女であり、自分と意見や考え方が食い違った女をわきまえさせようとするのは不満を感じる。

投稿 27 は、わきまえない女もフェミニストも迷惑な女であり、ネット上に「私はわきまえない女だ」などと自己アピールするのは嫌な気持ちになる。

この 3 つの投稿は、「わきまえない女」を「フェミニスト」と同じように扱い、どちらに対しても批判的な態度を示している。

投稿 28【2021.3.28：まりね】

東北大、不安や恐怖の感じ方に性差があることを発見：日本経済新聞
女は生理的に不安傾向が高いのは事実だが、だからといって形振り構わずお気持ちを発露していいわけじゃない。即断で「わきまえない」ことを勧めるフェミニズムは、全体の女の価値を下げる可能性だってある。

投稿 29【2021.3.5：ミズチ】

恥知らず…ですかね。 これだから「わきまえない女」は 女から嫌われる。 ただの自己主張にフェミニズムと言う言葉を使うな 男でも息子がおっきしたら屈むとか憤みはあるぞ

一方、投稿 28 の「わきまえない女」と「フェミニスト」をそれぞれ異なる集団と捉える投稿や投稿 29 の「フェミニズム」に対するポジティブなイメージの投稿でも、わきまえない女に対しては、ネガティブなイメージが依然として残っている。

投稿 28 は、「わきまえないこと」を勧めるフェミニストは、全体の女性の価値やイメージを下げる可能性があると説明しており、また投稿 29 は、わきまえない女はただの「自己主張が強い」、「わがまま」な女であるため、他の女から嫌われると説明している。

3.1.4 言葉の意味を説明する言説

今回の調査では、「言葉の意味を説明する言説」も多く見られた。「言葉の意味を説明する言説」というのは、主に「わきまえる女」や「わきまえない女」に対する定義をつける言説であり、またその定義について、自分の意見や考え方などを述べる言説もこの分類に入る。

「言葉の意味を説明する言説」に関する論調については、「わきまえない女」を批判・否定する投稿が最も多く、約 7 割を占めている。「わきまえない女」に関する中立的な論調と肯定的な論調の投稿はそれぞれ 24.29%と 7.14%であり、「わきまえない女」という言葉に付与された定義はほとんどネガティブであることが分かる。

まず、言葉の意味を説明する言説の中に「わきまえない女」に関する中立的な論調の投稿を見てみよう。

投稿 30 【2021.3.16：みどりのかいじゅう】

わきまえる女が出世するのではなくて男も女もわきまえる人が出世するんだと思うけど こう言っちゃなんだけど 私たちはわきまえない！って言ってるような人たちが言うところのわきまえない、は男女問わず本当の本当に能力の高い一握りの人達にしか許されないものな感じるんだけど

今ネット上には、「わきまえない女になりたい」と言っている女性たちが少なくない。投稿 30 によれば、これらの女性たちが言うところの「わきまえない」というのは、男女問わず社会生活の中に能力あるいは権力のある少数の人にしか許されないものと感じると述べている

投稿 31 【2021.3.2：いまじん】

「わきまえない女」とは、日本の昔の価値観で女性を前に出させない様に「女はわきましろ」と抑圧される所から端を発するのだと思う。 しかし今このお題目をつけて大声を上げている女性は、「何に対して」わきまえないようにしているのだろう。 言葉ばかりが一人歩きをしていり印象

投稿 32【2021.3.16：朧月@独り言】

そうですね 「わきまえない女」「私はわきまえない」なんてのが世を賑やかしましたが、鼻息荒く使っている面々は如何に無知を晒しているのか今一度考えるべきかと 今となっては「弁える」に抑圧の意味でもあるのですが、本来の意味を捉えれば「弁えている」は賛辞なんですよ

投稿 33【2021.3.28：怒りの中で生きている】

あ〜なるほど……「わきまえない女」タグの時にフォロワーが指摘してたようにこれもこれで（運動としては正しいし意図はわかるものの）言葉の選び方用い方にちょっと無頓着だったかな…って感じだね

投稿 31, 32 と 33 によれば、「わきまえない」という言葉は、女性が家父長制的な社会に抑圧され、それに対抗するために生み出した言葉であるが、今炎上しているわきまえない女と自称している人たちの投稿を見ると、「わきまえない女」という言葉の意味が変わるという違和感がある。

続いて、「わきまえない女」について肯定的な論調の投稿を紹介しよう。

投稿 34【2021.3.2：いくら@かがみよかがみ】

わきまえない と 攻撃的になる って 違うよね?? わきまえない ってのは、「世の中(あるいは目の前の失礼なヒト)から勝手に期待された“女”像」を、私はわきまえないゾ! ってことで良いんだよね?……合ってる?? #わきまえない女 #断らない女

投稿 35【2021.3.19：かしわもち@4m】

私はわきまえない女だし、この体型で幸せです。自分を苦しめる旧来の価値観に立ち向かうための言葉が出てきて心強く思う。

投稿 34 は、わきまえないというのは「攻撃的になる」という意味ではなく、目の前の失礼な人もしくは家父長制的な社会から勝手に期待された女性像に対抗することを意味している。投稿 35 もわきまえない女を肯定している投稿であり、わきまえない女という言葉で「自分を苦しめる旧来の価値観に向かうための言葉」と認識している。

一方、「わきまえない女」について否定的な定義をつける言説では、主に「侮辱語」、「モテない」、「コミュ障」、「社会に不適応」、「礼儀知らず」、「自分勝手」という 6 つの側面からわきまえない女を批判する。

投稿 36【2021.2.27：aoixxxholly】

なんか「わきまえない女」って流行ってるみたいだけど、それ馬鹿の代名詞じゃ……

投稿 37【2021.3.28：我々は皆少しずつおかしい（改名検討中）】

最近はやりの「わきまえないナントカ」。ウヨちっくなものへの反発を示す言葉ではあるけれど、この「身の程知らず」を思わせるこの言葉は実は自分も嫌いなんだよね

それは「女は黙ってる！」だとか「ナントカ人は黙ってる！」などという差別を意図するものではなく、ただ「バカが嫌い」という意味で

投稿 36、37 の投稿者は、「わきまえない女」が嫌いで、「わきまえない女」を自称している人に対し、「馬鹿」などの侮辱語を使い、彼女たちを批判している。

投稿 38【2021.3.2：リ】

モテるためにこんな考え方の奴らに抑え込まれるくらいなら声をあげてモテない女でいよ～っとわきまえないってやつ ^^

投稿 39【2021.3.2：サムおじさん】

わきまえない女って言ってる女の人、サバサバ女子と同じくらい”私はあえてこのスタンスなのよイジってくるなよ”って感じでガード堅いよな。気にするな多分そんな貴方はモテないし、んなら周りからはウザがられてるよ。

投稿 40【2021.3.4：ゲドーT.T】

わきまえない女と言うよりこれは単純にコミュ障なのでは？ってちょっとなった。

投稿 41【2021.3.15：ぱっつあんマークⅡ】

コミュ障のワイが言うのもなんですが、わきまえない女になる！なんて言ってる連中は「コミュニケーションになろう」って言ってるようにしか聞こえませんね。女としてじゃなく人としておかしい。

投稿 38 と 39 によれば、ネット上に声をあげるわきまえない女はモテない女であり、周りの人から嫌われる。また、投稿 40 と 41 は、わきまえない女をコミュニケーション能力が低く、相手の意見を聞くこともできないコミュ障の人であると定義している。

投稿 42 【2021. 3. 3 : yuka.s C&C crew STAY SAFE!】

最早言葉尻だけ取り上げると「わきまえない女」が正義だ！みたいな違和感がある。日本語としておかしい。わきまえない人は老若男女問わず社会生活の場としては有害な存在だと思う。そういう定義の日本語だったはず。わきまえない人は傍若無人な人と私は定義してるのだけど間違いなのかな。

投稿 42 は、ネット上に「わきまえない女が正義だ」という一部の人の考え方に対し、違和感があり、日本語としておかしいと説明している。また、この投稿者は、「わきまえない人」は男女問わず、社会生活に向いていなく、社会にとって有害な存在だと述べている。

投稿 43 【2021. 3. 23 : 市原 優也】

わきまえない女って今、流行りつつあるけど、男女関係なく場の空気を読んで弁えるのは大事だと思う。
そもそも、弁えないって礼儀知らずとか物事の思慮分別がつかない様という意味だから要約すると馬鹿って意味だからね。自ら私は馬鹿ですって言うことになるね

投稿 44 【2021. 3. 16 : 長谷川良品 | 放送作家】

わきまえない女が嫌いだしわきまえない男も嫌いだ。わきまえないとは礼儀を知らず厚かましい様を意味する。その意味をわきまえたら嫌いになるのが当然だ。こうしてわきまえない発言をしだけでもわきまえない人達から怒られそう。わきまえない人達は他人のわきまえない発言を許さないから私も許せない

投稿 43 と 44 は、主に「わきまえない女は礼儀知らずな人だ」と論じている投稿である。投稿 43 は、男女関係なく社会生活の中にその場の空気を読んでわきまえることは大事だと考えるており、わきまえない女を批判している。投稿 44 は、「わきまえない」という言葉を「礼儀知らず厚かましい様」と捉え、わきまえない人が嫌いだと説明している。

投稿 45 【2021. 3. 23 : きどころね】

自分の権利しか考えないわきまえない女とは友達になれないタイプです♫

投稿 46 【2021. 3. 28 : TR800@プシュー】

ダメだこりゃ！

わきまえない女とは、

自分勝手に、被害者ポジション維持のため、言ったことをころころ変える女って定義だな。

投稿 45 と 46 は、わきまえない女を「自分勝手な人」と定義している投稿である。投稿 45 は、わきまえない女は自分の権利しか考えない女であり、こういう女とは友達になれないと述べている。また、投稿 46 によれば、こういう自分勝手なわきまえない女はいつも被害者のふりをし、被害者のポジションを維持するため、言ったことをころころ変える。

3.1.5 自己アピールに関わる言説

自己アピールに関わる言説とは、自身が「わきまえる女」あるいは「わきまえない女」を名乗ることに関わる言説であり、またそういう言説に対する意見や考え方などを述べる言説もこの分類に入る。

「自己アピールに関わる言説」に関する論調については、「わきまえない女」を批判・否定する投稿が一番多く、約半分を占めている。「わきまえない女」に関する中立的な論調と肯定的な論調の投稿はそれぞれ 23.81% と 27.38% である（表 2）。

まず、自己アピールに関わる言説の中に一番多く「わきまえない女」に関する否定的な論調の投稿を見てみよう。

投稿 47 【2021. 3. 17 : インスタントメン】

まさに今こういうことが問題。 わきまえない奴は無能。男も女も。 わきまえない〇〇って名前の奴って、無能ですと言ってるただのバカ。

投稿 48 【2021. 3. 1 : ゴリラ】

何でわきまえない事が正しいと思ってんだ。男でも女でもわきまえないきやいけないところはあるだろ。わきまえない女じゃねーよ。私空気読みませんアピールして何の特があるんだよ。

投稿 49 【2021. 3. 17 : ねーぶる】

わきまえない女と自称する人は、自身のコミュニケーション不能をジェンダー平等で正当化している人が多い。これはサバサバや辛口、毒舌と共通する点もありますが、差別問題を含むので一層悪質に感じる。男女平等を目指して、自分の意思に反してわきまえない女になっている方は煽りを受けて可愛そうです。

投稿 50【2021.3.16：闇鍋奉行】

で、結局あの人たち「女性には反論も批判も許さない称賛あるのみ、男女平等なんだから能力に関係なく役員の半分は女性であるべき、逆らう奴は差別主義者決定」ですからね(;^_^A それこそが「差別」なんだよと多くの人が教えてあげてるのに、理解できず「私はわきまえない女でいたい！」

以上の 4 つの投稿は、主に何らかの形式でわきまえない女と自己アピール言説を批判する投稿であり、批判する理由は「ただの無能」（投稿 47）を含め、「空気を読まない」（投稿 48）、「コミュニケーション不能」（投稿 49）などもしばしば指摘される。

また、投稿 50 によれば、会社の中で役員を選ぶ場合、男女差別を消滅するため、個々人の能力を考えずに、男女半々という性別分布の均一化へのこだわりが強すぎることは逆にある種の「差別」であり、こういう「差別」を提唱するわきまえない女を理解できないと説明している。

投稿 51【2021.3.15：KTR_TY0】

周りでわきまえる、わきまえないという単語に反応する人を見ていると、ビジネスの現場で戦ったことがある、経験に基づいているのだろうかと思いたくなります。そもそもわきまえるよりも「機嫌が良い女」でいたいと思っています。

投稿 52【2021.3.18：推しのほっぺたがぷにぷに侍】

私も女なんだから、ツイッターでわきまえない女とかいってめちゃくちゃ意識高い系になってジェンダーにまだ先鋭的でない連中を上から見て優越感を得たいのだから

投稿 53【2021.3.26：せっかちぴんちゃん】

最近 わきまえない と自己紹介している女多いね。流行り？
女は流行りものが好きだからね

「わきまえない女」に関する中立的な論調の投稿について、「わきまえる」あるいは「わきまえない」と自己アピールする原因、またそれをめぐって起こした論争の理由を説明する言説が多い。

例えば、投稿 51 は、「わきまえる」や「わきまえない」をそれぞれ応援している人々は、職場などの社会生活の中で異なる立場に立ち、異なる経験に基づいている発言したため、論争が起きたかもしれないと説明している。

投稿 52 は、わきまえない女がわきまえる女などに攻撃する理由は自分のジェンダー意識の高さを指摘している。自分のジェンダー意識が高いと思っているため、わきまえる女などジェンダー意識がまだ先鋭的ではない人を上から見ることができ、優越感が得ら

れる。

また、投稿 53 によれば、ツイッターで「わきまえない」と自己紹介していることはある「流行り」であり、「女は流行りものが好きだから」、わきまえない女と自称している女性が多い。

続いて、「自己アピールに関わる言説」について、「わきまえない女」に関する肯定的な論調の投稿を紹介しよう。ここまでの「わきまえない女」に関する言説について、否定的な論調と中立的な論調の投稿はほとんど第三者の立場からそれを評価するものであるが、肯定的な論調では、主に当事者自分の物語を語っている。まず、「わきまえない女」と自称している投稿を見てみよう。

投稿 54 【2021.2.28：ぎゅうたん】

昨年(2020)の2月にPTA役員顔合わせで狭い部屋に20人くらい入れられてダラダラやってるから「世の中ではコロナのせいで会議や多人数の会食も中止になってるのに子供を預かる学校現場が甘すぎませんか」とぶちギレて以来PTA関係ほぼ中止になった、私は「わきまえない女」だったが悪いとは思ってないよ

投稿 55 【2021.3.3：辛子】

セクハラやモラハラだって自己主観だし、その人が辛いと感じたなら加害はやめて欲しいと思います。セクハラに苦情を述べたら自己主観でー！と口封じされるのでしょうか。私はわきまえない女だから、嫌だな。

投稿 54 は、会議中に自分の意見をはっきり言うのは「わきまえない女」であり、自分はそういうわきまえない女を悪く思わない。また、投稿 55 の投稿者も「わきまえない女である」と自己アピールしており、セクハラやモラハラなどにあっても苦情を言わないことが嫌いだと述べている。

投稿 56 【2021.3.19：シオタハルカ】

10代の頃はたとえ攻撃されてもわきまえないことを大事にしてた。20代は、わきまえる姿勢を見せてスムーズにやることを覚えて、10代の自分の不器用さを恥ずかしく思った。30代になって、女にわきまえさせようとする社会のいびつさによりやく気が付いた。40代の今は、いろんな女性たちの気持ちがわかる。

社会人になったばかりの頃、優秀な女友達たちが「あーあ、また会社でバカなフリしなきゃ」的な発言をよくしていたの、思い出しました。氷河期だったこともあり、わきまえないとボコボコにされるので、生き残るために仕方なかった面はあるけど、これやると確実に自尊心を削られるんですよね…。

投稿 57【2021.3.20：吉原賀子 Yoshihara Kako】

今私は 19 歳で、高校卒業後、社会に近くなったからか「わきまえた方がいい」圧力を目の前に感じて最近どうしていいのかわからなかった。ただ、様々な場所で「わきまえない女」が活躍しているのを見たり、「わきまえる」要因は社会にあることを知ると、やっぱり一生わきまえないでいたいなあと思う。

投稿 56 と 57 は、「社会」に関わる言説である。

投稿 56 の投稿者は、子供の頃はわきまえない人であったが、自分が成長することにつれて、女にわきまえさせようとする社会のいびつさに気づき、わきまえない人になりたいが、この社会に生き残るために「わきまえる女」になるしかないと述べている。

投稿 57 の投稿者は、高校を卒業したばかりの若者であり、一生わきまえないでいたい、社会に近づけば近づくほど、「わきまえた方がいい」という圧力を目の前に感じた。

投稿 58【2021.3.2：ウサ子@パニック障害】

こんなに男性の収入を頼りにしなければ生きられないような社会で、何人の女性が自由に生きているのだろう。それを思うと、心が苦しくなる。私はわきまえない女だ。でもそれは、わきまえない女でいられる経済的ゆとりがあるからだ。なりたくてもなれない。声も出せないでいる女性はきっとたくさんいる。

投稿 59【2021.3.16：チーボー】

今の社会で「わきまえない」でいる事には勇気がいる。自分もどうしても空気を読んで口をつぐんでしまう事が多々ある。これって男の問題で男が変わらないといけなと心底思う。

投稿 60【2021.3.22：みづき】

毎年入る商品の入荷日をひと月間違えて来店したお客さんに「毎年四月中旬からですよ」と言っただけなのに「そんなにえらそうに言わなくてもいいじゃないか」と怒られました。女は男にいちいち間違いを指摘してはいけないそうですよ。わきまえないといけないんですって。はんつ。あっほらし。

投稿 58、59 と 60 は、「男性」に関わる言説である。

投稿 58 によれば、女性が男性の収入を頼りにしなければ生きられないような社会では、自由に生きられず、声も出せないでいる女性は多くいる。この投稿者はこういう社会でわきまえない女になれるのは、ただわきまえない女でいられる経済的なゆとりがあるからと説明している。

投稿 59 の投稿者は、「わきまえない」でいることには勇気があると考え、社会生活の

中でどうしても空気を読んで口をつぐんでしまうことは多い。これは「男性の問題」であり、男性が変わらないといけないと述べている。

投稿 60 は、自分の店を営業する時、ある男に怒られてしまうことを語っている。このことから、男は女をわきまえさせようとしており、また女は男の違いを指摘してはいけないということを感じた。

投稿 61 【2021. 3. 24 : 鳥井 遠】

亡母は森喜朗世代。県下一の進学校に行けたが女のくせにと父親に反対され女子校へ。国立大卒業後、国の研究機関に入所も、ただ偉ぶる男と「女性=常に守られるべき存在」感覚の女の中で、孤軍奮闘し定年まで勤めた。何事にも、わきまえない人だった。私の誇り。ぜひ「大人」のロールモデルを目指して！

投稿 62 【2021. 3. 23 : pu-pu】

父が男尊女卑、女性蔑視、もの言う女が大嫌いな男の代表みたいな人やったから、男がわきまえない女を大嫌いなことは身をもって分かってますよ。
自分は見事にわきまえない女になりましたけどね...

投稿 61 と 62 は、「家族」に関わる言説である。

投稿 61 は自分の母の話述べており、母のことを誇りに思っている。この投稿によれば、祖父は家父長制的な意識が強い人で、母が県下一の進学校に行く時、「女のくせに」と祖父に反対された。就職した後、母は偉ぶる男とわきまえる女と一緒に勤めたが、何事に対しても、わきまえない人だった。

投稿 62 も、父が男尊女卑、物言う女が大嫌いな男の代表であるが、自分は見事にわきまえない女になったと述べている。

投稿 63 【2021. 3. 16 : 沙羅】

旦那に「扱いづらい女でおれ」って言われてて、職場ですぐに謝るな！とか言われて初めはめっちゃ抵抗感あったし、抵抗感しかなかったんやけど、わきまえない女になっていくにつれて、あらゆる雑務や面倒ごとを投げつけられなくなってラクになったねん。 結局、わきまえてたら都合よく消費されんねん

投稿 63 は、「職場」に関わる言説である。

この投稿者がわきまえない女になるきっかけは、夫に「職場ですぐに謝るな」と言われたことである。最初は少し抵抗があったが、わきまえない女になっていくにつれて、あらゆる雑務や面倒ごとを投げつけられなくなって、意外と楽になった。

3.2 小括

以上のツイッター上における「わきまえない女」の説明言説を「女性と女性の対立を表す言説」、「女性と男性の対立を表す言説」、「フェミニズムに関わる言説」、「言葉の意味を説明する言説」、そして「自己アピールに関わる言説」の5種類に分けて検討してきた。表3は今回集まったツイッターにおける「わきまえない女」に関わる言説の主なテーマを表すものである。

表3 ツイッターにおける「わきまえない女」に関わる言説の主なテーマ

	「わきまえない女」に対するイメージ		
わきまえない女に関する言説	中立	否定	肯定
①女性と女性の対立を表す言説	女性の価値観の多様性や生き方の自由 (34.36%)	「わきまえない女」は社会（職場）に適合しない (55.58%)	「わきまえない女」は男女平等な社会づくりを促進する (6.6%)
②女性と男性の対立を表す言説	男女対立や性差別の反対、女性の自主性の尊重 (37.55%)	「わきまえない女」の性格や態度の批判、「わきまえない女」は女性の社会的信用を低下させていく、「わきまえない女」が男女平等を過度に求める (18.27%)	男性中心社会に対する不満 (12.18%)
③フェミニズムに関わる言説	フェミニストは「わきまえない女」が嫌い (21.74%)	フェミニストは「わきまえない女」と同じ迷惑な女 (78.26%)	(0%)
④言葉の意味を説明する言説	ネット上の「わきまえない女」という言葉の意味や使い方に対する違和感がある (24.29%)	「わきまえない女」は「モテない女」、「コミュ障のある女」、「社会に不適応の女」、「礼儀知らずな女」、「自分勝手な女」などを意味する言葉 (68.57%)	「わきまえない女」は家父長制的な社会から勝手に期待された女性像を対抗する言葉 (7.14%)
⑤自己アピールに関わる言説	「わきまえる」あるいは「わきまえない」と自己アピールする原因、またそれをめぐって起こした論争の理由 (23.81%)	「コミュニケーション不能」、「空気を読まない」など「わきまえない女」と自己アピールする人への批判 (48.81%)	「わきまえない女」になりたいが、社会からの圧力を感じる (27.38%)
合計	(33.33%)	(53.10%)	(13.57%)

まず、「女性と女性の対立を表す言説」の場合、中立的な論調として、わきまえるかどうかはあくまで女性の個性によるものであり、女性は自分の価値観や生き方を選ぶ自由があると論じている。半数以上は「わきまえない女は社会に適合しない」と考えていた。反対に「わきまえない女」を応援・肯定する投稿は少なかったが、そのような立場のツイートでは主に「わきまえない女は男女平等な社会づくりを促進する」という視点から述

べられていた。

「女性と男性の対立を表す言説」では、中立的な論調の言説が一番多く、男女対立や性差別の反対を説明しており、またここでも女性の自由あるいは自主性が言及される。

「わきまえない女」を肯定する言説は主に「男性中心社会」を批判する言説であった。一方、否定する言説は「わきまえない女の性格や態度への批判」、「わきまえない女は女性の社会的信用を低下させていく」や「わきまえない女が男女平等を過度に求める」という三つの視点から述べられていた。

「フェミニズムに関わる言説」について、「わきまえない女」を肯定する投稿はほとんどなかった。中立的論調の投稿も 2 割しかなく、大半は「わきまえない女」を否定する投稿であった。これらの投稿は、「わきまえない女」を「フェミニズム」と同じようなものとして扱いながら、なんらかの形式でそれを批判している。ツイッターでは、「フェミニズム」に対するネガティブな印象を持つ人が少なくないことも伺える。

「言葉の意味を説明する言説」の場合、「わきまえない女」を肯定する投稿では、基本的に「わきまえない女」を「家父長制的な社会から勝手に期待された女性像を対抗する言葉」として捉える。それに対し、「わきまえない女」を否定する投稿では、「ただの侮辱語」、「モテない」、「コミュ障」、「社会に不適応」、「礼儀知らず」、「自分勝手」という 6 つの側面から説明していた。それ以外では、昨今のネット上における「わきまえない女」という言葉の意味が常に変化し、その言葉に対する違和感があるという中立的な投稿も見られた。このように、ツイッター上における「わきまえない女」という言葉に付与された定義は人によって異なることがうかがえるものの、その多くがネガティブなものであることが分かった。

最後に、「自己アピールに関わる言説」に関する投稿についても、「わきまえない女」を否定する投稿が一番多く、主に「コミュニケーション不能」や「空気を読まない」などの角度からの批判であった。また、「わきまえない女」に関する中立的な投稿では、主に投稿する際に「わきまえる」あるいは「わきまえない」と自称している理由を説明するものである。さらに、「わきまえない女」肯定する投稿は主に当事者自分自身の物語を語っている。これらの投稿によれば、「わきまえない女」をポジティブな意味として捉え、またそれになりたい女性がいるが、「わきまえるべきだ」という暗黙なルールがある日本社会から圧力を感じている。

つまり、全体から見ると、ツイッターでは、「わきまえない女」を批判・否定する言説が多く、「わきまえない女」を注目すると同時に「社会」という言葉がしばしば言及され、「わきまえない女」をめぐる論争の前提や基本的な問題の背景は「女性の社会進出」にあるということを示唆している。

第 4 章 新聞記事における「わきまえない女」言説

本章では、SNS 上の「わきまえない女」に関わる言説の構造をより把握するため、比較分析の対象として、新聞記事における言説について、検討をおこなう。

4.1 新聞記事における「わきまえない女」に関わる言説の分析

SNS 上の「わきまえない女」に関わる言説の構造をより把握するため、比較分析の対象として、朝日新聞と読売新聞における検索できる全期間の記事のうち、同じワード、つまり「わきまえない女」を含む記事を分析対象とした。また、「わきまえない女」とい

う言葉が主に「森喜朗事件」の後に記事に現れ、全期間で該当した朝日新聞と読売新聞の記事数はそれぞれ21件と0件にあったため、今回の調査では、朝日新聞の記事を全部一読し、「わきまえない女」の扱い方によって分類を行った。投稿の分類が重複すると判断した場合は、それぞれの各分類項目に加えている。ツイッターのデータと同様に、記事の内容を分類した後に論調によって整理した（表4）。記事の整理分類は、おおむね以下の3つに分けられた。

- ① 「わきまえない女」の物語を描く言説（8件）
 - i. 小説などの文学作品における個人の物語を描く言説（4件）
 - ii. 現実社会における個人の物語を描く言説（4件）
- ② SNSに関わる言説（5件）
 - i. SNS上の論争原因を分析する言説（2件）
 - ii. SNSがジェンダー平等を促進する言説（3件）
- ③ 「森喜朗事件」を説明する言説（8件）
 - i. 「森喜朗事件」の経緯及び炎上する原因を説明する言説（3件）
 - ii. 日本社会のジェンダー格差に関わる言説（6件）

		「わきまえない女」に対するイメージ			
わきまえない女に関する言説		中立	否定	肯定	合計
① 「わきまえない女」の物語を描く言説	小説などの文学作品における個人の物語を描く言説	0	0	4	8
	現実社会における個人の物語を描く言説	0	0	4	
② SNSに関わる言説	SNS上の論争原因を分析する言説	2	0	0	5
	SNSがジェンダー平等を促進する言説	0	0	3	
③ 「森喜朗事件」を説明する言説	森喜朗事件」の経緯及び炎上する原因を説明する言説	3	0	0	9
	日本社会のジェンダー格差に関わる言説	0	0	6	
合計		5	0	17	22

表4 朝日新聞における「わきまえない女」に関わる言説の分類

出典：朝日新聞の記事分類による筆者作成

4.1.1 「わきまえない女」の物語を描く言説

「わきまえない女」の物語を描く言説というのは、小説などの文学作品における「わきまえない女」の物語を描く言説であり、また現実社会における「わきまえない女」という個人の物語を描く言説もこの分類に入れた。

まずは、小説などの文学作品における「わきまえない女」の物語を描く記事1と記事2からみてみよう。

記事 1【2021. 10. 13：信仰と芸術と、画家・山下りんの「道」 朝井まかてさん、歴史小説「白光」】

いまなら、称賛をこめて「わきまえない女」と呼ばれるかもしれない。日本で初めて、ロシア正教のアイコン（聖像画）を描く画家となった山下りん（1857～1939）。時代の制約のなか、周囲とのあつれきも恐れず画業に身を捧げた生涯を、作家の朝井まかてさんが歴史小説『白光（びやっこう）』（文芸春秋）に描き出した。

りんは幕末、笠間藩（現在の茨城県中部）の藩士の娘に生まれた。〈絵さえ描ければ〉という少女は、筆を執ることが許されなくなるであろう縁談を拒むように、家を飛び出す。

「故郷も女性一般の幸せも、絵を描くこと以外はすべてを捨てられた人」。取材で読み込んだ資料からは、りんのそんな姿が浮かび上がってきたという。

記事 2【2021. 6. 10：（まだまだ勝手に関西遺産）江戸を生きた奴の小万 「わきまえない女」今も昔も】

歴史上の日本女性をフェミニズムで読み解く著書『「姐御（あねご）」の文化史』で、小万を取り上げたフリー編集者の伊藤春奈さん（43）はこう話す。「経歴は諸説ありますが、大坂に実在した江戸時代のカッコいい女性の代表格で、江戸でも大変人気がありました。女性が抑圧された時代に、規範に逆らって生きた姿が喝采を浴びたのでしょう」

小説、映画、演劇。エンタメ化され、様々な筋書きで、義に厚く腕っぷしの強い奴の小万は描かれてきた。令和のいまも上方の講談や落語で新たな姿が語られている。この春には、伝楽亭（同市旭区）で講談師の旭堂南華（きょくどうなんか）さん（58）が披露した。

小万の幼なじみの娘が家の没落で身を売られかける。そこを救った米仲仕の親方に、小万たちは弟子入り。商いを興し、やがて飢饉（ききん）に苦しむ人々のために立ち上がる――。才覚と志を持ち、まっすぐに生きる大坂の女が輝くストーリーだ。聴き入っていた50代の女性は「こんな魅力的な女性の物語があったなんて。森喜朗元首相の女性蔑視発言にはイライラさせられたけど、スカッとしました」と興奮気味だった。

記事 3【2021. 3. 20：みなさんから・編集部から】

1629（寛永6）年、風紀を乱すとして遊女歌舞伎が禁じられてから200年以上、日本に女性の役者は存在しませんでした。6、7面「はじまりを歩く／流行歌」で書いたように、歌が大ヒットして舞台に客を呼べるスーパースターだった松井須磨子という女性の存在を、当時の周囲の男性たちはうまく扱いかねたようです。

彼らが残した文章や発言をみると、須磨子の芸は褒めても、実像は生意気だったとか、田舎くさかったとか、ケチだったとか、悪口のオンパレード。「わきまえない女性」であった須磨子への上から視線が目立ちます。

スターは孤独と言われます。ましてや女優という存在がまだもの珍しかった時代に先頭を走る女優の孤独はいかほどだったか。自伝で須磨子是这样書いています。

以上三つの記事は、文学作品の中に登場した「わきまえない女」について説明する記事である。記事 1 によると、山下りんという「わきまえない女」は、画家になるという夢を抱き、筆を執ることが許されなくなるだろうと考え、縁談を拒み、家を飛び出した。記事 2 は、江戸時代の小万という女性は、商いを興し、飢饉に苦しむ人々を守り支えるという物語を掲載しており、また記事 3 によると、女性役者としての須磨子が周りの人、特に男性からの非難や軽蔑を受け、孤独さを感じながら、女優という存在がまだ珍しかった時代に先頭を走っている。

これらの新聞記事は、女性の社会進出が抑圧されることを当時の社会背景にし、当時の女性にとって、男社会の中で認められ、地位を築く女の生き方を選ぶのは一般的であり、「女なのに男のように腕っぷしが強い」という話はその時代に合わないが、そこに組み込まれない女の生き方もある。それは文学作品に登場した山下りん和小万など周りの偏見を恐れず社会に出る女性であり、各時代の「わきまえない女」のヒーロー像とも言える。このように、文学作品の中に登場する「わきまえない女」という言葉は主に誉め言葉であり、「女性の社会進出」とつながり、ポジティブなイメージが与えられている。

続いて、現実社会における個人の物語に関する記事を分析していく。

記事 4 【2021. 3. 4 : (声) 息子が見せた、男女差別への対応】

「ジェンダー」という言葉を大学生の時、社会学の講義で知った。知らず知らずのうちに「性的役割」が頭に植え込まれていることを学んだ。女兒の物にはピンク、男児には青が多用されている。洗濯洗剤のCMに出るのはほぼ女性。学校の書類に母が父の名前を記入する。そんな事柄に疑問も抱かずに生きてきた。

気づいてから私は、「わきまえない女」になった。意見を言えば「我が強い」と返され、「それはセクハラだ」と言えば「気にしすぎだ」と言われた。男尊女卑と受け止められる父の発言には真っ向から対抗。母が、私を止める役割だった。彼女は「わきまえている」、いや「わきまえさせられてきた」世代だからである。

今年のお正月。父が「女の子は結婚すればいいんだから」と12歳の息子の前で言った。彼は間髪入れず「じいじ、それは男女差別です」と言って、その場を立ち去った。

そうか、事実だけを突きつけ、父の意見を聞き入れない態度を取るの新しい戦い方だ。社会も人も、変わるのには時間がかかる。だから私も息子のように淡々と、そして冷静に、事実だけを示していこう。「〇〇さん、それは男女差別です」と。

記事 4 は、筆者の家族における各世代間の違う「ジェンダー観」を説明している記事である。親世代は「男尊女卑」という潜在意識がいまだにあるが、自分と息子は男女差別のことに對し、意見をはっきり言うという「わきまえない」人になった。つまり、この記事から、家父長制的なジェンダー意識が親世代に残される一方、若者のジェンダー意識が高まる傾向にあり、世代差によるジェンダー観の対立あるいは衝突があるという日本の社会背景が分かった。

記事 5【2021. 2. 28：（フォーラム）わきまえたこと、ある？】

「わきまえる」「わきまえない」なんて、死語だと思っていました。「女は話が長いけれど、会議に入れてやっているんだから」、と女性蔑視ともいえる言葉が決定打となって、人々の怒りが爆発しました。

実は同性の集団でも若い参加者が発言すると、年長のボスが「あの人は、わきまえていない」という目で見ることあります。「わきまえろ」とは上位から下位にしか言えない言葉で、暗黙のうちに存在する「力関係を読みなさい」という要求です。あらゆる差別撤廃の機運が先進国の常識になる中で、70代以上の与党男性政治家たちがあっけらかんと、男性中心主義的な価値観に基づき発言することは、アジア諸国でもまれな現状ではないでしょうか。

「わきまえさせられる」という「支配―被支配関係」は男女間のみに存在するのではなく、記事 5 は、職場などの同性集団の中でもこういう「力関係」が存在すると説明している。日本社会は男女ともにわきまえる社会であり、学校教育や集団の中に常に「わきまえ」を教えられる。また、「わきまえろ」とは上位から下位にしか言えない言葉であり、その言葉の背後には、「力関係を読みなさい」という意味も含まれる。この記事によると、男性中心主義的な価値観に基づき発言はアジア諸国でも見られが、アジアの中では日本が特別男性中心主義的価値観である。

4.1.2 SNS に関わる言説

新聞記事における「わきまえない女」に関する言説は、ジェンダー問題を論じた際、SNS などのメディアを言及することが多い。まずは、SNS 上の論争原因を分析する言説を見てみよう。

記事 6【2021. 10. 13：声を集め、世界をつなぐ 新聞週間 2021】

今年 2 月、東京五輪・パラリンピック組織委員会の森喜朗前会長による女性蔑視発言を受け、ツイッターには発言にちなんだ「#わきまえない女」の投稿がわき起こった。ムーブメントになったのは、多くの人に「ちょっとおかしい」「なんだか不公平では」と感じながらもやり過ごしてきた経験があったからだろう。

こうした声を、新聞はどれほどすくい取れずにきたことか。特にジェンダーの取材をするようになってから、「自分には見えていない世界があるかもしれない」ことに、新聞こそが鈍感すぎたと痛感している。年齢や性別など記者が多様性を欠いていたことも理由の一つかもしれない。

SNS を通じて誰でも発信でき、情報がいくらでも手に入る時代。だが、自分と同じ意見しか見えにくくなりがちだ。社会のあらゆるところで分断が深まっている。マスメディアに、私に、何ができるだろうと考える。

読者の心の中にある小さな違和感に丁寧に耳を傾け、それを言語化するプロでいなければならないと思う。言葉を届けて理解を広げ、分断を少しでも埋めたい。

そのためには「この人になら話してみようかな」と思ってもらえる記者でありたい。日々そんなことを考えながら、次に報じるべきことを探している。

記事 6 は新聞記者がジェンダーなどの社会問題取材するときのあり方を紹介したものである。今回の「わきまえない女」をめぐる議論は、主に SNS というツールによって引き起こされており、新聞は SNS と比べ、男女平等など個々人の声を拾い上げにくいことが指摘されている。ただし、SNS を通じて、年齢・性別問わず誰でも発信でき、また情報がいくらかでも手に入れることができる一方、新たな問題が現れてもいるという。それは、自分と同じ意見ばかりが目に入りやすいという SNS の特性であり、私たちは「情報の泡に包まれる」ように、社会との隔絶がさらに進んでしまうという問題である。この記事は、SNS の特性から生まれる「社会の分断」をできるだけ埋めるため、記者として読者と直接に言葉で交流してみることの重要性を示唆している。

記事 7 【2021. 9. 29 : (耕論) ミソジニーの正体 江原由美子さん、二村ヒトシさん、木村忠正さん】

男女差別がなくならないのは、「ミソジニー」という概念で表せるような対女性の差別意識が男性社会にあるからなのか。ネット世論の研究者はどう見ているのかが、今回のテーマだと思います。

私の研究対象は SNS やニュースサイトなどですが、ネット空間には、弱者や少数者がその立場を利用して権利を声高に主張し、不当な利益を得ているのではないかと感じる層がいます。

マジョリティーとしての恩恵を実感しない「非マイノリティー」の人たちが、マイノリティーの政治的主張を嫌悪的に批判する構図で、「非マイノリティーポリティクス」と概念化できます。まずは生活保護受給者や在日コリアン、障害者、性的少数者などに向かいます。

女性差別への批判が高まるにつれ、男性からの反批判も出ています。構造的弱者の問題のはずなのに、一定の女性が弱い立場を逆手にとっているという認識からの批判となる。「非マイノリティーポリティクス」の構図に通じます。(木村忠正)

記事 7 も、男女差別をめぐりネット上の論争を説明する記事である。この記事によると、ネット空間には、女性を含む弱者や少数者などがその立場を利用して権利を声高に主張し、不当な利益を得ていると考える人が少なくない。そのため、ネット上の女性差別への批判が高まるにつれ、男性や他の女性などからの反批判も出ています。つまり、かつては多数派によるマイノリティに対する無自覚な暴力だったものが、いまはネットで「非マイノリティポリティクス（弱者こそ強者だという倒錯した議論）」が生まれ、自覚的な暴力として顕在化した。この点については、第 3 章で述べてきたネット上の「わきまえない女」を批判する言説が多いことと関連すると考えられる。

続いて、SNS がジェンダー平等を促進する言説を見てみよう。

記事 8【2021.3.1：社会と性の関係、考える手引き 「ジェンダー入門」ブックガイド】

様々な立場から自身または社会と「性」の関係を見つめ発信してきた5人の選者にオススの本を紹介してもらった。学術書から小説、ノンフィクション、漫画まで。令和の時代の「ジェンダー入門」、あなたはどこから始める？

誰もが「またか」と思ったに違いない森喜朗氏の性差別発言。本当に2021年のことかとめまいがしてくるようだが、以前との変化といえば「#わきまえない女」のようなハッシュタグがすぐさま作られ、抗議の声が止まらないことだ。

これだけではない。日常に潜むジェンダーバイアスは今年もおそらく様々なところで目にするだろう。問題の本質は何か。SNSを追うだけではなく、一度咀嚼して自分の頭で考えてみる時間を持つのに、本を読むことは一つの有効な方法だろう。

20年は、ジェンダーをテーマにした多くの本が出版された年でもあった。小説集を刊行した山崎ナオコ嬢さん、エッセー集を刊行したバービーさんにも選者に加わってもらった。

この記事はジェンダー入門のガイドブックを勧める記事である。この記事から近年の日本社会では「ジェンダー」をテーマにした本が多く発行され、ジェンダー問題に対する興味を持つ人が少なくないことが指摘されている。ジェンダー問題を明らかにするため、本を読むこと以外に、ジェンダーをめぐる、SNSなどのニューメディアで議論することもジェンダー問題に対する思考を深める手段の一つだろうと提案されている。

記事 9【2021.3.18：（ひと）佐治洋さん 「公共のメディア」目指し動画配信する元テレビディレクター】

「#わきまえない女たち」「原発事故から10年」……。話題のトピックについて文化人らがリモートで語り合う動画を次々配信する「チューズ・ライフ・プロジェクト（CLP）」の代表を務める。

動画は無料で公開し、広告に頼らず運営資金を広く募る「市民スポンサー」の形をとる。昨年はクラウドファンディングで3千万円超を集めた。「圧力や忖度（そんたく）、視聴率の関係でテレビが取り上げない話題を掘り下げて」といった要望に、マスメディアへの不信感を痛感し、複雑な思いにもなった。（中略）

「情報はライフラインと一緒に、なくてはならないもの。自由で公正な社会のため、公共のメディアをつくっていききたい」。市民が支える議論の場として存在感を増しつつある。

記事 10【2021.3.14：（フォーラム）記者サロン 夫婦別姓、選べる日は】

次の男女共同参画基本計画づくりにあたって、意見募集が行われると知り、若い世代の声を届けたいと思いました。今後5年間のための計画は、これから進学や結婚、出産などを経験する若い世代には、特に大きな意味を持っています。

若い世代には、「このままの日本では、自分らしく生きていけない」という声が高まっています。こうした声をSNSで集め、政府に届ける活動をしました。提言は基本計画にも反映され、「若い世代の声って、政治に届くんだ」と実感しました。

いまの制度では、家族になる前に2人の絆が壊れてしまう。好きで結婚するのに、どうしてもネガティブなものになっていると思う。「自分がいつか結婚するとき、姓を選べる制度であってほしい」と思っている若い世代は多い。選択的夫婦別姓の導入を待っている人にとって、1年1年は本当に大きいんです。

ジェンダーや政治に興味がある人をSNSで募ったら、すごく反応があった。ジェンダーや政治について気軽に話したり、仲間を作ったり、問題だと思うことを大臣に話しに行ったりする力をつける場を、これから作っていきたいと思います。

記事9と記事10は、SNSを「ジェンダー平等や自由を促すツール」として捉える記事である。記事9によると、現代人は「わきまえない女」など圧力や忖度によるテレビが取り上げにくい話題を掘り下げる要望があると述べており、また記事10も日本の若い世代が自分らしく生きていくことを追求し、ジェンダーや政治に興味がある人が増加傾向にあることを指摘している。この二つの記事から、これからの日本社会ではSNSなど自由に議論できる公共メディアを作っていく必要性がうかがえる。

4.1.3 「森喜朗事件」の説明および分析に関する言説

この節の記事では、単に「森喜朗事件」の経緯及び炎上の理由などを説明するだけでなく、それを関連させてジェンダーに関することも論じている。

記事 11【2021. 2. 19：森会長、放言連発 “モリノピック” 開幕中 トップ退場のゴールへまっしぐら ワイド特集】

新型コロナウイルスの収束が見えないなか、ただでさえ開催に“懐疑論”が根強い東京五輪・パラリンピック大会。組織委員会のトップである、森喜朗会長から飛び出した「女性蔑視」発言で、もはや国民の理解を得ることは難しくなった。

きっかけは、2月3日の日本オリンピック委員会（JOC）臨時評議員会。森会長はこの場で「女性が多くいる会議は時間がかかる」「私どもの組織委の女性はみんなわきまえている」などと耳を疑う言葉を連発。「五輪憲章」はいかなる差別も認めないとされており、東京五輪が掲げる「多様性と調和」とは正反対の放言にはあきれられるばかりだ。「性差別」だとして、海外メディアやアスリートなど国内外から批判の声が上がった。

森会長は翌4日に急きょ、謝罪会見を開いて発言を撤回したものの、辞任は否定。記者から「会長として不適任では？」と問われ、「あなたはどう思いますか」と逆質問ではぐらかし、「おもしろおかしくしたいから聞いているんだろ」といらだちを隠さなかった。

組織委としては早期の謝罪会見で“火消し”に走ったが、逆に、火に油を注いだけとなったことは否めない。ツイッター上では「#わきまえない女」のハッシュタグがつくられ、森会長の発言に対して皮肉を交えて批判する投稿が相次いだ。

この記事は「森喜朗事件」の経緯を述べた記事である。組織委員会の森会長は「女性が多くいる会議は時間がかかる」「私どもの組織委の女性はみんなわきまえている」などの発言について、ネット上では「女性差別の発言」と捉え、国内外から批判する投稿が相次いだ。この記事によると、「五輪憲章」は性差別を含むいかなる差別も反対しているため、森会長の発言は東京五輪が掲げる「多様性と調和」という理念に従わない。これは「森喜朗事件」が炎上になる理由の一つだろう。

記事 12 【2021. 2. 11 : 「#わきまえない女」 共感 森会長発言に抗議、署名 1 4 万筆】

なぜこれほど共感が広がったのか。番組にも出演した同志社大大学院の岡野八代教授（53）は「黙らされてきた女性たち、とりわけコロナ禍で苦しむ女性たちの傷口に塩を塗った」と指摘する。「コロナ禍が続くなか、多くの女性が失業し、自殺も増加。医療や介護、保育などの現場で身を削る女性たちは声をあげる余裕もない。いざ発言すれば『長い』と言われる。権力者が、女性をはじめ、さまざまな異論に耳を傾けず、排除を続けてきた末路の発言だった」

番組には昨年、「# 検察庁法改正案に抗議します」のハッシュタグでツイッターデモの起点となった30代の会社員、笛美さんも出演。自分にも「わきまえ癖」がある、と明かした。朝日新聞の取材に「広告業界で働いてきて、男性に下手に出ることが美德と教えられてきた。『わきまえ癖』のある人が、自分の意見を言うのはとても勇気がいること」と話した。

（中略）

男性からも批判の声が多くあがっている。ジェンダーの問題を男性の目線から考えたエッセー「さよなら、俺たち」などの著書がある文筆家の清田隆之さん（40）は「今回の発言はあまりにひどく、多くの男性は、自分と森さんをきっぱり切り離れたから批判できた。森さんを目立って擁護したのは、各組織のトップで誰からも意見を言われず、自らを省みることができなくなった『森さんのような』立場の男性だけだった」と分析する。

記事 12 も「森喜朗事件」の炎上理由を分析する記事である。東京五輪・パラリンピック組織委員会の森喜朗会長の女性蔑視発言をめぐり、ツイッターではこのハッシュタグをつけた投稿が広がっている。閣僚や自民党幹部などの一部から森氏を擁護する発言も出るなか、「わきまえない女」たちの声に共感が広がり、発言から1週間が過ぎても批判は止まらない。この記事によると、ここまで共感が広がるのはコロナの影響がある。コロナ禍で失業した女性や医療や介護、保育などの現場で身を削るなど生活に苦しんでいる女性が増やした。働く女性がいざ発言すれば「長い」と言われるのは権力者が女性に対するいじめであり、女性たちの怒りを引き起こすのは当然だろう。またこの記事は、男性からも森喜朗の発言を批判する声が多くあがっていることを指摘しており、多くの男性は、森喜朗と違う立場に立ち、男性であっても自分と森喜朗をきっぱり切り離れたから批判できたのではないかという。

記事 13 【2021. 2. 15：わきまえてはいけない 森喜朗氏の女性蔑視発言に怒り】

森喜朗・元首相の女性蔑視発言の中で「わきまえる」という言葉が注目されている。日本社会に根を張ってきた「わきまえること」は、美德なのか、それとも因習なのか。

(中略)

■価値観等しい時代の産物 サンキュータツオさん (学者芸人)

「わきまえる」の意味として、昨年 11 月に出た新明解国語辞典 (8 版) は、「(自分の置かれた立場から言って) すべき事とすべきでない事とのけじめを心得る」と説明し、「限界 (時と場所) をわきまえる」「身の程をわきまえない思い上がり」という用例を示しています。

私は、国語辞典を版違いも含め 230 冊ほど持っています。どれも「物の道理を十分に知っている」「よく判断してふるまう」とか「分別のある人」というような、ポジティブな意味が載っています。

大事なのは「他人からあれこれ言われず、自分で判断する」という点。前提になるのは、みな価値観を共有し、暗黙の秩序を了解していることです。その意味で文脈依存度が高く、極めて日本的な表現で、外国語への翻訳は難しい。いまの言葉なら「空気を読む」ということでしょう。

「分をわきまえる」とか「身の丈に合う」という言い方があります。身分制社会だった江戸時代は、身分によって、明治以降も性別や家柄、学歴などによって、わきまえるべき共通の価値観がありました。いずれの時代も、社会の秩序を保つために必要とされたのです。

しかし現代社会は、男女や世代の違い、国際化の進展などによって価値観や生活様式が急速に多様化しています。わきまえるべき基準は、人によって様々です。もし上の者が「わきまえよ」と命令すれば、その人を基準とした価値観だけを是とするハラスメントになるでしょう。

(中略)

言葉の細部には、それを発する人の意識が宿ります。戦後の復興から高度経済成長、そして東京五輪を経てのスポーツ振興。森さんの世代の男性には、大変な時代を生き抜いてきたという自信と自負があります。だから「これまでこの方法で良かったのだ」「オレの言うことを聞け」という傲慢 (ごうまん) さも見えました。「わきまえる」発言で、そうした男性中心社会の秩序を乱してはいけない、という意識が露呈したとも言えます。

「わきまえない女」に関する新聞記事では、「わきまえない女」を言及した際に、「わきまえる」や「わきまえない」という言葉に対し、ある程度の意味付けをしている。記事 13 は、直接に「わきまえない女」という言葉の意味を議論し、森喜朗の発言を分析している。日本の国語辞典が「わきまえる」という言葉を定義付ける際には、「物の道理を知っている」や「よく判断してふるまう」など基本的にポジティブな意味を与える。この記事によると、「わきまえる」という言葉は日本社会における特有的な表現であり、今の言葉で言えば、「空気を読む」という意味に似ており、日本社会の秩序を保つため、「わきまえること」は必要とされている。しかし、グローバル化の進展や SNS の普及などによって価値観が急速に多様化している現代社会では、わきまえる基準は人によって異なり、森喜朗事件の炎上は現代日本人の価値観の衝突を表すものであり、彼の発言から「男性中心社会の秩序を守るべき」という家父長制的な価値観が見られると指摘している。

記事 14【2021. 2. 21：（根ほり葉ほり）ジェンダー格差、なぜ縮まらないの 県男女共同参画審議会長・伊藤真知子さん／山形県】

東京五輪・パラリンピック大会組織委員会の森喜朗・前会長の女性蔑視発言をきっかけに、日本社会のジェンダー格差が改めて浮き彫りになった。なぜ日本ではジェンダー格差がなかなか縮まらないのか——。東北公益文科大学教授で、県男女共同参画審議会の会長を務める伊藤真知子さん（67）に聞いた。

——森氏の発言をどう捉えていますか。

国際社会から厳しい批判を受け、日本社会の現在地が垣間見えたのではないのでしょうか。日本のジェンダーギャップ（男女格差）ランキングは、153か国中121位。政策などの意思決定の場に女性が少ないことや、男女の賃金格差など、日本は依然として「ジェンダー格差大国」です。

コロナ禍で、女性に経済縮小の負荷がより大きくかかる「女性不況」が指摘されたり、一斉休校で増えた育児や家事、介護など家庭内のケアワークを主に女性が担ったりといった格差が顕在化しました。（中略）

——県内の状況はどうでしょうか。

県内では、夫婦の共働き率が約7割と全国的にも高く、子育てをしながら働いている女性の割合が多いのが特徴です。一方で、県内の女性が家事や育児に携わる時間は男性の約3倍。3世代同居も多く、女性は仕事と家庭内のケアワークを掛け持ち、重い負担を負っているように思います。

「森喜朗事件」を説明する記事には、日本社会のジェンダー格差を言及したものが多い。記事 14 は、森喜朗事件の背後に隠された日本のジェンダー格差を分析する記事である。この記事によると、日本では、世界ジェンダーギャップランキングは153か国中121位に位置付けられ、これは男女格差が日本社会に根深いことを示す結果である。また、この記事では、「政策などの意思決定の場に女性が少ない」、「仕事と育児が同時に担うという重い負担を負っている」、さらに「男性と同じレベルの賃金をもらっていない」などの女性が日本社会に直面している問題がまとめられており、その背景には、「性別役割意識の固定化」があるとされている。

記事 15 【2021. 2. 15：わきまえてはいけない 森喜朗氏の女性蔑視発言に怒り】

森喜朗氏から発されたあまりに許せない発言に、日本、いや世界中から批判が起きた。
ものを言わない日本社会が招いた結果なのだろうか。変わらなければならない。

(中略)

「話が長いとか、競争意識が高いとか、男性だってそういう人はたくさんいる。男性の中で女性が発言するのは、とても勇気がいること。わきまえるとか言い出すと、女性が気兼ねなく発言したり、トップになったりすることもできなくなる。だから私はわきまえない女でいたい」

私は政治の世界を20年以上取材してきた。かつては政治家も官僚も、取材するジャーナリストも完全な「男社会」。少しずつ空気は変わってきたが、今回、嫌な思い出がよみがえった。暗黙のルールに満ちた「オールド・ボーイズ・クラブ」(森氏を「必ず問いつめる」とツイッターで発言したカナダのIOC委員も同じ表現を使っていた)にがんとはねつけられ、恐怖を覚え、馬鹿にされた(と思えた)。

男の人にはこの気持ち、わからないだろう。そう言うと、問題が何も解決しないと思い、ぐっとのみ込んできた。それなのに20年たってこれか、と思う。

それは「わきまえすぎた」せいなのかもしれない。私に限らず。だからみなさん、「わきまえない女」でいきましょう。いや、女だけじゃない。男性も。

記事 15 も「性別役割意識の固定化」が進んでいる現代の日本社会を「男社会」と捉え、「わきまえない女」の炎上はモノを言わない日本社会が招いた結果だと論じている。男性が常に優遇されている社会に生きていくため、女性は男性の中で自由に話すこともできない。この記事から、日本社会に根付く差別意識がうかがえ、性別による役割分担の意識を払拭し、男女平等な社会を作るために、男女ともに臆せず意見を言う「わきまえない人」になることが期待されると述べられている。

記事 16 【2021. 2. 7：(天声人語) 失言と価値観】

振り返ると失言のデパートのような森喜朗さんの政治人生である。その言葉は無軌道のようにいて、背景にある価値観も見えてくる気がする。論争や説得の軽視である。どちらも本来、政治に不可欠のはずなのに

▼首相時代には、総選挙を前に無党派層についてこう述べた。「(選挙に) 関心がないといって、寝てしまってくれればいいんですけど」。政策を訴え、こっちを向いてもらう努力などする気がないように聞こえた

▼今回の「女性がたくさん入っている理事会の会議は時間がかかる」にもつながる。一番の問題は「女性だから」「男性だから」という色眼鏡で最初から見ている点だ。同時に、会議で議論するのがマイナスであるかのような価値観があらわになった (中略)

▼森さんの発言を皮肉った「#わきまえない女たち」、そして「#DontBeSilent (黙っていないで)」といった言葉がネット上で広がる。「男たちによる調整型」を続ける多くの組織に対する異議申し立てでもあろう。

記事 16 も、日本の「性別役割意識の固定化」を論じる記事である。森喜朗の「女性が

たくさん入っている理事会の会議は時間がかかる」という発言から、性差別の価値観が見えてくる。この記事によると、森喜朗の発言を皮肉った「わきまえない女」といった言葉がネット上に広がるにつれて、男を中心とする政界や多くの組織に対する異議を申し立てる投稿が多くみられるようになった。政治家の発言は日本社会を映す鏡であり、「女性だから」、「男性だから」という色眼鏡で見ている点は、現在日本が抱える重要な社会問題だろうと指摘している。

記事 17 【2021. 9. 29 : (耕 論) ミソジニーの正体 江原由美子さん、二村ヒトシさん、木村忠正さん】

「ミソジニー（女性嫌悪）」。男性の心の奥底に潜む女性への差別意識に関連し、SNSなどで最近よく見かける言葉です。女性「嫌悪」……どういふことなのでしょう。

■わきまえない女性へ、ムチ 江原由美子さん（東京都立大学名誉教授）

ミソジニーは女性嫌悪と訳されますが、女性一般への嫌悪感情とは異なります。男性の幻想を裏切って、「ノー」と言う女性へのバッシングです。

大学で授業をしていると、こんな話を聞きます。女子学生がアルバイト先の飲食店で「笑顔で」などと指示されてその通りにすると、男性客が「彼氏、いるの？」などと言ってくる。女性だから優しく相手をしてくれるだろうと思いついていっているわけです。女性は面倒臭いと思いつつ、受け流します。もしツンケンした態度を取った場合、相手が怒り出すことは容易に想像できるからです。

私はジェンダー秩序という言葉を使いますが、女性というカテゴリーに、「気配り」「優しさ」などを読み込む。ミソジニーとは、そういう秩序に割り当てられた女性性から外れた女性、いわば「わきまえない」女性に振るわれるムチです。

ですから「女性が好き」かどうか、ミソジニーかどうかは関係ありません。わかりやすい例が、東京五輪・パラリンピック大会組織委員会の森喜朗会長の発言でした。「（組織委員会の女性）は）わきまえておられて」などと言った。「女性を蔑視する気持ちは毛頭ない」と釈明しましたが、自分にとって都合のいい女性をいくら大切にしても関係ない。女性を、自分の意をくむかどうかで分けている。その意味で、ミソジニーのメカニズムを象徴する言葉です。

ムチの一方でアメもあります。選択的夫婦別姓が改めて注目されたとき、反対論者として報道で目立ったのは女性でした。不利だとされているはずの女性が反対しているのだから男女平等の問題ではない、と。家父長制秩序はこうやって「わきまえる」女性を厚遇する。そして、さらなるアメを求める女性も巻き込んで「わきまえない」女性を攻撃していく。男性だけではなく、女性によるミソジニーも存在するわけです。

日本は他の欧米諸国に比べてジェンダー格差が大きい。とりわけ顕著なのが、政治の世界です。私はこれから「わきまえない」女性に対して、政治の世界でより強いバッシングが起きていくのではないかと懸念しています。

記事 17 は、森喜朗の発言を「ミソジニー」のメカニズムを象徴する発言と捉え、「ミソジニー」という概念を説明した上で、日本社会に潜在する、特に政治の世界に著しいジェンダー格差を論じている記事である。この記事によると、「ミソジニー」というのは女性一般への嫌悪感情とは異なり、家父長制的なジェンダー秩序に割り当てられた女性性から外れた女性への差別である。今回の森喜朗事件を例とすれば、森喜朗は女性を蔑視や差別しようとする気持ちはないかもしれないが、自分の意をくまない女性、いわゆる「わきまえない女性」に対する偏見を持つのは確実である。また、「父長制秩序はこうやって「わきまえる」女性を厚遇する。そして、さらなるアメを求める女性も巻き込ん

で「わきまえない」女性を攻撃していく。」現在の日本社会では、男性だけではなく、女性によるミソジニーも存在することが分かった。

4.2 小括

本章では、「わきまえない女」に関する新聞記事を「わきまえない女の物語を描く言説」、「SNSに関わる言説」、「森喜朗事件を説明する言説」という3つの言説群に分けて検討してきた。

「わきまえない女の物語を描く言説」の場合、小説などの文学作品に登場した「わきまえない女」の物語と日本社会に実在する「わきまえない女」の物語という2パターンが分けられる。どちらのパターンも「わきまえない女」を「女性の社会進出が抑圧された」という社会背景の下に自分の生き方を選び、社会に活躍する女性」として捉え、ほとんどの記事は「わきまえない女」を肯定するものだったと言える。

「SNSに関わる言説」については、主に「SNS上の論争原因を分析する言説」と「SNSがジェンダー平等を促進する言説」から構成される。「SNS上の論争原因を分析する言説」に関する新聞記事では、主に中立的な視点からSNSというメディアの特徴を論じている。一つは、「自分と同じ意見しか見えにくい」ことであり、もう一つは、非マイノリティポリティクス、いわゆる「弱者がSNSを利用することによって自分こそが強者だ」という倒錯した議論が生まれるということである。こうしたSNSが社会の分断をもたらし、社会集団間の論争を引き起こしている一方、論争の中で人々のジェンダー意識を高まり、ジェンダー平等を促進できるツールとも言える。

続いて、「森喜朗事件」を説明する言説は、「森喜朗事件が炎上する原因を説明する言説」と「日本のジェンダー格差に関わる言説」が分けられる。「森喜朗事件が炎上する原因を説明する言説」は主に中立的な論調で論じており、炎上する原因として「発言内容は東京五輪が掲げる「多様性と調和」という理念に従わない」や「コロナ環境で失業などに苦しんでいる女性たちの怒りを引き起こしやすい」などがあげられる。また、「日本のジェンダー格差に関わる言説」はほとんど「わきまえない女」を肯定する投稿であり、「性別役割意識の固定化」は現在日本社会が抱える重要な社会問題であり、家父長制的なジェンダー秩序は「わきまえない女性」の社会進出を阻む要因の一つと見なされていた。

第5章 「わきまえない女」言説に内包されたジェンダー秩序

5.1 「家父長制」と「女性の社会進出」

ここまで、ツイッターにおける「わきまえない女」というキーワードを含む投稿と朝日新聞における「わきまえない女」に関連する記事について分析してきた。そこからみえてきたのは、「わきまえない女」について論じる際に、日本の「家父長制社会」や「女性の社会進出」がどちらのメディアでも言及されることである。この点からも、「家父長制社会」はネット上における「わきまえない女」をめぐる論争の重要な背景であることや、「女性の社会進出」が日本社会の直面する基本的な問題の一つと言えることが、改めて浮き彫りとなった。

そこで「家父長制」の概念について、改めて確認しておこう。『現代社会学事典』（2012）では、「男子家長が家産と家族成員を支配・統制する制度」と定義されている。

一般的に、日本中世の総領家が庶子家に対する統制制度、いわゆる「惣領制」が「家父長制」の始まり、近世になって、「家父長制」は幕府統制の道具として武士階層で定着したとされる。1989 年の明治民法では、「家」を制度として制定し、女性が結婚すると夫の家に入り、夫の『家の呼称』である氏を名乗るようになった。こうした制度は、1947 年の新民法で廃止されたが、これまでの間に国民の意識に浸透しており、制度自体がなくなった現代社会においても、未ださまざまな慣習として残存している。

たとえば上野（2009）は、「家父長制」の本質は「性」に基づき、権力が男性優位に配分され、性役割が固定的に配分される規範の総体であり、またこうした総体の中に「性支配」が生み出され、親族集団中の男性メンバーと女性メンバーの間に、ないし社会領域の中の層としての男性層と女性層の間にもあると指摘している。この指摘から考えると、SNS 上のジェンダー炎上は、家父長制は社会各領域に浸透している結果であり、家父長制的な考え方は、我々の日常生活の中に満ちていると本論の調査でも推察可能である。

一般的に「性支配」というものは、日本社会に優位を立つ男性が弱い立場の女性を思い通りに支配することと思われるが、江原（1995）によれば、「性支配」とは、私的領域も含むほとんどの場面で、「女性の活動や行為についての自己認識や、それらに基づく社会認識を否定し無化する」ような力が働いていることを指しているという。つまり、女とは何か、男とは何か、女らしさとは何か、男らしさとは何かなど様々な自己定義や定義そのものが、性支配を生み出しており、性支配を維持するメカニズムになっているのである。近年の SNS の普及によって人々は自由に発信することが可能になったことにより、ネット上にあふれている個々人の言説そのものが「家父長制」のジェンダー秩序を維持・強化する役割を果たしていると考えられるだろう。

また、「家父長制」により、男性が外で働き、女性が家事や育児を担うという性別役割分業を支える基盤が生まれる。上野（2009）によれば、最広義の家父長制のもとでは、男性と女性の間に一種の「利益集団」が構築され、未開社会から産業社会まで、男性は様々な制度的な手続きで集団内の女性の権利を排除している。また、男性が自分の利益を守る手段として、上野は「賃労働力から排除する」と「女性の労働を男性の労働より低い位置をつける」という 2 点を指摘している。ここまで検討してきた「わきまえない女」に関連する言説の中にも「政策などの意思決定の場に女性が少ない」と「男性と同じレベルの賃金をもらっていない」という言説がみられた。つまり、政治や経済問題の背後に現代社会の女性が直面している重要な問題は「社会進出」であり、今の日本社会の中に潜んでいる「家父長制」に繋がっているといえよう。

さらに、「わきまえない女」について語る際に、ツイッターでは、「空気を読まない」、「社会に不適応」などの言葉でそれを批判する投稿も多く見られた。これらからは、日本社会のジェンダー秩序を保つために、現代の日本人は暗黙のルールとして「性別役割分業をわきまえる」ことが要求されていることがうかがえる。このように考えていくと、「なぜ現代社会の日本人、特に女性にとって、わきまえることが重要なのか」という疑問が生じる。この問題を読み解くために、日本における「わきまえる」の背景について確認しておきたい。

5.2 日本における「わきまえる」の背景

「わきまえる」という言葉は日本特有的な言葉であり、「秩序に従って」という意味を含め、「階級」とも言えるだろう。会社内の役職のように男女にも上下の階級があるとの

前提で、「階級に合わせて物を言う」というのがわきまえる問題の本質かもしれない。森喜朗の「わきまえる」発言では、男性中心社会の秩序を乱してはいけない、という意識が露呈した。このように、メディア上における言説からこの秩序や階級は、明確に日本社会に存在していることがわかったが、外からは隠れており、暗黙の秩序とも言える。

「男性中心社会」のジェンダー秩序については、セジウィック（1985）が提唱した「ホモソーシャルな欲望」という概念が参考になるだろう。セジウィック（1985）によれば、「二人の男が同じ一人の女を愛している時、いつもその二人の男は、自分たちの欲望の対象だと思っている当の女のことを気にかける以上に、はるかに互いが互いを気にかけている」ことを指摘している。また、社会学の分野において、「ホモソーシャル」は、女性を排除することによって成立する、男性間の緊密な結びつきや関係性を意味している。加藤（2017）は、このようなホモソーシャルの成り立ちは社会において女性が差別されてきたと述べている。なぜかという、日本社会では、「主婦付き男性労働者」をモデルとして成り立っており、男と男の結びつきが優先される。異性愛主義の男性から見れば、女性とはもっぱら性的な対象であり、それゆえ職場や政治などの公的領域にはふさわしくない、男性中心のジェンダー秩序を乱しやすい存在とみなされ、常に社会から排除されるのである。

ここでもう一つ言及しておかなければならない点がある。それは「性別職務分離」である。「性別職務分離」とは、女性社員をいわゆる女性向けの職種に偏って配置する人事慣行である。女性向きの職種について、経営者たちに対する聞き取り調査の結果によれば、経営者が考える女性向きの職種は、「繰り返しの多い定型的または補助的な仕事」と「男の顧客の気を引き女の顧客を安心させるようなソフトな接客」が一番多い（熊沢，2000）。このように、日本の労働市場においては、個人の意欲・能力・適性とは関係なく、「性」による振り分けが最も安定性を保ち、経済的であることを前項で見た。日本社会では、主に男性である経営者や管理職の人々は、「女性はそもそもこうした仕事に向いていない」という差別的なジェンダー観によって、性別職務分離を起化してしまい、これは賃金やキャリアの男女格差の主たる生成要因だろう。

このように、これまでの日本社会では、家父長制的な意識が既に人々に浸透しており、一般的に、日本社会の個々人は、ジェンダー秩序に従いながら行動することが要求されると考えるが、本調査では、新聞記事におけるほとんどの言説は、「わきまえない女」を肯定・支持する言説であり、森喜朗の「わきまえない女」発言の炎上事件から見ても、現代社会では「性別役割分業をわきまえる」という日本のジェンダー秩序に従わない人も少なくないだろう。また、朝日新聞とは異なり、ツイッター上では「わきまえない女」を批判する言説は多く見られる。これは、SNSの特性あるいはSNSが果たしている社会的機能につながると推測できる。

5.3 SNSの社会的機能と「フィルターバブル」

2000年代に入って、高機能な検索エンジンのグーグルが普及し、情報は検索エンジン経由で読まれるようになる。例えば、最近のSNSはFacebookにしろ、ツイッターにしろ、フィード（配信）型になっており、自分が情報を見に行かなくても、Facebookやツイッターの画面を見ただけで、友人やフォロー相手の流した情報が自動的に配信されるようになる。佐々木（2016）によれば、このようなフィード型のSNSを使うとき、情報を的確に収集するためには、自分が情報源として信頼できる人にフォローやフレンドの

形で直接つながらなければならない。また、今の SNS には、アルゴリズムにより、ユーザーの興味関心や検索傾向を分析し、コンテンツを選び分ける「フィルタリング」機能や、各ユーザーが見たいだろうと思われる最適化されたコンテンツを提供する「パーソナライゼーション」機能がある。これらの機能により、過去のユーザー情報をもとに、各人に最適化されたインターネットコンテンツが表示され、似た情報や視点に囲まれ、「人は自分の見たいものしか見ない」という状態に陥ってしまう。こういう状態を説明するために、イーライ・パリサー（2011）が「フィルターバブル」という概念を提示している。

「新しいインターネットの中核をなす基本的コードはとてもシンプルだ。フィルターをインターネットにしかけ、あなたが好んでいるらしいもの——あなたが実際にしたことやあなたのような人が好きなこと——を観察し、それをもとに推測する。これがいわゆる予測エンジンで、あなたがどういう人でなにをしようとしているのか、また、次になにを望んでいるのかを常に推測し、推測のまちがいを修正して精度を高めてゆく。このようなエンジンに囲まれると、我々はひとりずつ、自分だけの情報宇宙に包まれることになる。わたしはこれをフィルターバブルと呼ぶが、その登場により、我々がアイデンティティや情報と遭遇する形は根底から変化した。」（パリサー、2011）

つまり、我々が SNS を使う際に、常に似たような情報に囲まれ、自分と違った立場、異なる意見が目に入らなくなってしまう、一人ひとりが「情報の泡」に包まれているようである。こうした「フィルターバブル」は、明らかに問題点がある。

まずは、前述にあるように、フィルターバブルにより、自分と違う価値観や考え方を持つ人が見えなくなり、情報の共有が体験の共有を生む時代において、フィルターバブルは、我々を社会という大きな集団から引き裂く遠心力となる一方、同じような志向を持つ人たちが集まりやすいと考える。

次に、フィルターバブルは、そこにはいることを我々が選んだわけではないという問題がある。SNS では、圧倒されるほど豊富な情報源や選択肢を提供してくれる一方、情報を自ら選択するというより、SNS の向こうが勝手に来るといほうが適切である。こうした情報が、いくつかの小集団の中に回遊してしまい、外部の真っ当な情報が流れ込みにくくなる。そして、「泡に包まれる」人々は、内部の情報をますます強固に信用するようになり、社会との隔絶がさらに進んでしまうだろう。

インターネットが普及した現在では、ひとりの人間が挙げた抗議や批判のメッセージに賛同する人たちがこれまでよりも容易につながれ、大きな勢力となる。例えば、ツイッターで動画の内容に異議を唱えた文章をリツイートし、シェアすることで共感と同意を獲得できるかもしれない。他方、一部の人から批判されているこれらの動画イメージを肯定し、問題のないものだととらえる人たちもいることだろう。こうした人たちは、動画の内容を批判する人たちとはまったく異なる解釈を行い、むしろ批判する人たちを非難するかもしれない。フィルターバブルに包まれた世界は、情報の差をもたらし、ツイッター上におけるジェンダー炎上について、対立し合う陣営双方の論争を激化する重要な一因と考える。

また、社会問題をめぐる論争により個々人のジェンダー意識の高まりや男女平等な社会づくりにも役立つ側面もある。家父長制が支配した時代において、個々人は家父長制

的なジェンダー規範に従い、自分はそのようにあるべきものとして、認識されることに
対し、現代社会の場合、先行研究や今回集まった新聞記事にも述べたように、伝統的な
ジェンダー規範を「否定的な読み方」で捉えることは多い。しかし、ツイッターのデー
タから見れば、「わきまえない女」について、多くの人はそれぞれ個別の教育、成長過程
で形成された独自の解釈ルールに則って、「否定的な読み方」より「反省的な読み方」で
ジェンダー規範を理解することが見られた。SNS の登場とともにこのような反省がさら
に進展することで、あらゆるジェンダー規範が批判の対象となる一方、ジェンダー規範
の多様化によりさまざまな価値観がぶつかりあいながら、より平等的なジェンダー秩序
を構築する可能性があると考えられる。

終章

本論文では、日本の SNS 上で頻繁に起こっているジェンダーに関する炎上問題について取り上げ、SNS 空間における現代社会の日本のジェンダー秩序について研究を行った。先行研究の議論を踏まえた上で、SNS 空間における日本のジェンダー秩序を把握するため、ツイッターや新聞の言説を用いてアプローチするのは比較的有効的な手段であった。今回はネット炎上の一例として、2021 年 2 月 4 日のツイッターではトレンド 1 位になった「わきまえない女」というキーワードを取り上げ、ツイッターと朝日新聞の両方ともに言説分析を行った。

「わきまえない女」に関する言説を整理した上で、内容ごとにツイッターと朝日新聞の言説を分類すると、それぞれ 5 つと 3 つに分けられた。それぞれの言説を分析した結果、政治や経済問題の背後には、「社会進出」という現代社会の多くの女性が直面している重要な問題が潜んでおり、今の日本社会の中に潜んでいる「家父長制」に繋がっていることを明らかにした。

また、ツイッターにおける「わきまえない女」に関する言説、特に女性自身が日常生活で経験したことを語る言説から、「家父長制」のジェンダー秩序を保つため、現代社会の日本人は暗黙のルールとして「性別役割分業をわきまえる」ことが要求されていることがうかがえる。「性別役割分業をわきまえる」ことは現代社会の日本のジェンダー秩序の重要な一部分と言えよう。

続いて、朝日新聞の言説とツイッター上の言説の相違点を考察した。新聞記事におけるほとんどの言説は、「性別役割分業をわきまえる」という日本のジェンダー秩序を批判しているが、ツイッター上では「わきまえない女」を批判する言説は多くある。こうした論調の差は、SNS の特性、あるいは SNS が果たしている社会的機能につながると推測できる。SNS 上の「フィルターバブル」は、情報の差をもたらし、ネット炎上などの対立し合う陣営双方の論争を激化する一方、個々人のジェンダー意識の高まりや、男女平等な社会づくりに役立つ側面もある。ツイッターのデータから見ると、「わきまえない女」について、多くの人はそれぞれ個別の教育、成長過程で形成された独自の解釈ルールに則って、「反省的な読み方」で日本のジェンダー規範を理解することが見られた。SNS の登場とともにこのような反省がさらに進展することで、あらゆるジェンダー規範が批判の対象となりうる。今の SNS 空間では、単なる家父長制という伝統的なジェンダー規範に支配されるのではないと言える。ジェンダー規範の多様化によりさまざまな価値観がぶつかりあいながら、より平等的なジェンダー秩序を構築する可能性があると考えられる。

本研究では、ジェンダー炎上の一例として「わきまえない女」に関連する言説から SNS 空間における日本のジェンダー秩序を考察したが、他の事例やキーワードを選定することにより、本研究結果と異なる可能性もある。よって、SNS 空間における日本のジェンダー秩序を考察するため、今後も多様な視点で継続して同様な調査を行っていく必要があることを指摘して本論を終えることとする。

参考文献

- 赤川学, 2012, 『社会問題の社会学』 弘文堂
- アライドアーキテクツ株式会社, 2020, 「ツイッターユーザーによる企業公式アカウント利用実態調査」
(<https://service.aainc.co.jp/product/echoes/voices/0040>, 最終閲覧日: 2021 年 10 月 3 日)
- Eli Pariser, 2011, *The filter bubble: what the internet is hiding from you*, Penguin UK (井口耕二訳, 2016, 『フィルターバブル—インターネットが隠していること』, 早川書房)
- 江原由美子, 1995, 『装置としての性支配』 勁草書房
- Eve Kosofsky Sedgwick, 1985, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (Gender and Culture Series), Columbia University Press (上原早苗・亀沢美由紀訳, 2001, 『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』, 名古屋大学出版社)
- Goffman, E, 1959, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. Prentice Hall. (石黒毅訳, 1970, 『スティグマの社会学』, せりか書房)
- 濱野智史, 2008, 『アーキテクチャの生態系—情報環境はいかに設計されてきたか』 NTT 出版
- 平井智尚, 2012, 「なぜウェブで炎上が発生するのか—日本のウェブ文化を手がかりとして」第 29 巻 4 号
- Ibarra, P. R. ・ J. I. Kitsuse, 1993, *Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems*, J. A. Holstein and G. Miller eds, *Reconsidering Social Constructionism: Debate in Social Problems Theory*, New York: Aldine De Gruyter, 25-58. (中河伸俊訳, 2000, 「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素—相互作用論の立場からの社会問題研究のための一提案」 平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学——論争と議論のエスノグラフィー』 世界思想社, 46-104.)
- 市川孝一, 2018, 「社会問題化した広告表現—炎上 CM から見えてくるもの」『文芸研究: 明治大学文学部紀要』 明治大学文芸研究会第 134 号 pp. 51-75
- Jean-Francois Lyotard, 1979, *The Postmodern Condition, Postmodern culture, technology, epistemology* (小林康夫訳, 1989, 『ポスト・モダンの条件 知・社会・言語ゲーム』 水声社)
- 治部れんげ, 2019, 「2019 年の「ジェンダー炎上」で起きた 3 つの大きな変化」 現代ビジネス講談社
(<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/69427?imp=0>, 最終閲覧日: 2021 年 10 月 3 日)
- Joel Best, 2016, *Social Problems*, W. W. Norton & Company (赤川学訳, 2020, 『社会問題とは何か』 筑摩書房)
- 加藤秀一, 2017, 『はじめてのジェンダー論』 理想社
- 加藤尚吾・加藤由樹・千田国宏, 2011, 「携帯メールにおける返信のタイミングと感情方略に関する調査: 四種類の感情を伝えるメッセージへの返信に注目して」 教育情報研究第 27 巻第 2 号 pp. 5-12

- 国広陽子, 2012, 『メディアとジェンダー』 勁草書房
- 行動する女たちの会, 1999, 『行動する女たちが拓いた道—メキシコからニューヨークへ』 未来社
- 熊沢誠, 2000, 『女性労働と企業社会』 岩波新書
- 佐々木俊尚, 2016, 「コンピューター環境がつくりだす「楽園」のような世界の危険性」 早川書房
- 三浦展, 2005, 「消費の物語の喪失と、さまよう「自分らしさ」」『脱アイデンティティ』 上野千鶴子編第3章
- 宮下美砂子, 2019, 「現代日本のライフスタイルとジェンダー—「炎上」時代の広告から考える」『人文公共学研究論集』第40号
- 村松泰子, 1990, 「ニューメディアとジェンダー」 竹内郁郎編『ニューメディアと社会生活』 東京大学出版会
- 村松泰子, 1997, 「テレビCMのジェンダー分析—映像言語と価値観を解説する」 鈴木みどり『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』 世界思想社
- 延島明恵, 1998, 「日本のテレビ広告におけるジェンダー描写」『広告科学』 日本広告学会
- 荻上チキ, 2007, 『ウェブ炎上 ネット群衆の暴走と可能性』 筑摩書房
- 大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一・見田宗介（その他）, 2012, 『現代社会学事典』 弘文堂
- Raewyn Connell, 2002, GENDER, Polity. (多賀大監訳, 2008, 『ジェンダー学の最前線』, 世界思想社)
- 瀬地山角, 2020, 『炎上CMでよみとくジェンダー論』 光文社新書
- 鈴木みどり, 1992, 『テレビ・誰のためのメディアか』 学藝書林
- 総務省, 2011, 「ソーシャルメディアの可能性と課題」 情報通信白書第3章第2部第2節
- 総務省, 2017, 「平成29年度版情報通信白書」
- 高史明, 2015, 『レイシズムを解剖する』 勁草書房
- 多賀太, 1996, 「青年期の男性性形成に関する一考察—アイデンティティ危機を体験した大学生の事例から」 九州大学教育社会学研究第58集 pp. 47-64.
- 武本隆行, 2019, 「炎上する広告—ジェンダー感からみる多様化社会の課題」 日本マーケティング学会『カンファレンス・プロシーディングス』第8号 pp. 110-117
- 田中和子, 1984, 「新聞に見る構造化された性差別表現」 福岡安則編『マスコミと差別語問題』 明石書店
- 田中辰雄・山口真一, 2016, 『ネット炎上の研究』 勁草書房
- 田中洋美・高橋香苗, 2021, 「若者によるソーシャルメディアの利用とジェンダー—大学生を対象とするアンケート調査をもとに」 情報コミュニケーション学研究第20号 pp. 95-110
- 上野千鶴子, 2009, 『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平』 岩波書店
- 上野千鶴子, 2001, 『構築主義とは何か』 勁草書房
- Vivien Burr, 1995, An introduction to social constructionism. Routledge. (田中一彦訳, 1997, 『社会的構築主義への招待—言説分析とは何か』 川島書店)